

石高は千五百
冊数は四十七

廓景色雪の茶會

石高は千五百
冊數は四十七
廊景色雪の茶會

第 壹

座 本 竹 本 千 太 郎
豐 竹 此 吉

歌都々と名にこそ立れ。雪は富士の根月武藏野よ。花の鎌倉。色所く。な。フシ名高き花の桐ヶ谷。今を盛りの櫻木に。雲かと紛ふ花見幕。谷一面に打はへし中に。色有一群は。鹽冶の舍弟縫之助。物言花の膝枕。昔誰が千本の櫻植初てと。歌に詠だる芳野にも。中々負ぬ桐ヶ谷。斯咲揃ふた花の詠めは。地主の櫻も及ばぬ粧何と大夫盛物て有ふがな。ナアニ云しやんす事じややら。芳野で花を見さんす時は。此花除て外にはと。譽さんしたを見る様な。地相人次第で氣の替る。其移り氣なお心が。癩の種ては有はいと。妙な妬の言草は。フシ寢能に花や咲ぬらん。地此方に控ゆる勘平に。深き戀中薄雲が。傍に園町玉琴が。詞コレ焚付るじやないけれど。お前の殿御も氣が多そふな。些お煽起んせと。地腰押摸容。直と見て取る早野勘平。詞何も言まいぞ。ナ場所が悪いぞ。コリヤく勘平。場所が悪いとはソリヤ何云。イヤサ其義は。ケ様でござります。今日は大殿判官様。師直父子を此地に於て。花見がてらの御招請の斯る場所にて御遊興は。いかゞ敷存じ奉ると。地粹な様でも何處やらに。フシ武士の心は別なりし。地縫之助打點頭。詞實に夫よ兄貴の手前が。併し待よ。此儘行ぬるは餘まり殘念。アレく向ふの櫻が下へ。遠退て吞直そ。櫻の花と此方の花。地競て見よふと手を取て皆々打連歩み行。地世に有ば鼠も虎皮の鎧の鞆。散敷花を踏しだく。

手振の武士が黒羽織。高家の威勢高股立。先を拂はせ乗物の。脇に引添フシ扨從の武士。詞列侯の使者到れり。お行
 列立ませい。地ハア。撥と路傍に乗物を。立るフシ程なく近付使者。地土邊に頭を押下て。詞某義は桃井若狹守が家
 來。誠に主人が此度の大役。首尾能相勤ます様。御引廻し願奉る。依て御機嫌御伺の爲。寸志の進物。御受納願
 ひ奉ると。地差出す目錄藥師寺が。請取て押開き。詞黃金五拾枚。絹布の料金三拾枚。右之通とフシ讀上れば。地戸
 を開かせて高の師直。故實の家のフシ鼻高々。地歩み出て打詠め。詞コレハく痛入たる仕合。ハア御辭宜申すも却
 て失禮。次郎左衛門皆取納めよ。エ。式作法を教るも。此様な折には頓と困る。イヤ又云じやないが。恐く勅使饗應
 の大禮。日本廣しといへ。知た者は師直一人。手柄させうと失敗せうと某が心次第其處を失策す桃井殿。ヤモ御發
 明な成れ方。慥に受納致したと申て給りやれ。地太義くと挨拶も。緩々機嫌桃井の。使はフシ悦び立歸る。地此方
 の幕高く絞らせ。立出る鹽冶判官。詞コレハく師直公。寸暇を得させ給はぬ所。差る設も有箇間數請待申上る處。
 不厭御入來下さる段滿悦至極。イヤ是はく判官殿。誠に御厚志忝い。併無藝無能の某でござらふならば。誰か
 見返り人もござるまい。古實古禮の式作法。ヤモ存じた事が身を責ると。勅使下向の度毎には。彼家からの進物はか
 らの機嫌伺ひ。山吹色で葺ます故。玄關は井手の玉川勝りハ、、、と地袴の襷襖に。鵬が。爪を隠せしフシ掴み煩
 地夫とは知れど然有ぬ體。詞誠に明日は勅使の御下着。萬事宜しく御差圖。偏に願奉る。地イヤ先づ此所へと幕の
 内設の席へフシ伴はる。地又もしとく行列の。花麗も同じ供廻り。麻上下の着捌も國侍と思しきが。跡に下つて
 附來り。詞恐ながらお尋申さん。お乗物に召れしは師直公と見掛奉る。某義は伯州鹽冶が家來。竹森喜多八と申者と
 地皆迄言さず驚坂伴内。詞ム、鹽冶家來竹森喜多八唐人の落胤聞及ぶ。用事有ばお屋敷へ參る筈。ハツ只今お屋
 敷へ參りし處。則主人が御招申し御出駕と承り直様參上仕る。無禮御赦免下さるべし。此度主人判官高貞。饗
 應の役目を蒙り。式萬端は師直様御差圖と承る。國家老大星由良之助始。家中の者より獻じ奉る此一折。宜數御

披露下されよと。地心を差し千兩の。桐の箱入白臺に。フシ乗て敬ひ差出せば。地目當は違ふ乗興の。戸を開けて高の左平太。光る眼玉も忽ち鹽の目。詞奴々主が主なら家來迄が。氣の付た此進物。親共へ取次致し。鹽治殿の此度の役目。極上々の首尾にせいで何と致さふ。氣遣ひ致されな。ハア、有難きお詞偏に頼奉ると。地禮義を述て竹森はフシ元來し道へ立歸る。地跡に驚坂くつ／＼笑ひ。イヤハヤ手柄は仕たい物な。幸親殿師直様。彼所にお出成るれば。君に代て此進物。某披露致さんと。行を呼留。コ、コリヤ／＼待々件内。粹と呼べる／＼左平太が。身近く遣ふ様にもない。去迎は時代な奴。汝も知て居る通り吉原の傾城。小紫には首丈の此左平太。揚代何か金の欲い胴膨へ。持て來居つた此千兩。親の物は子の物。我物入ずに太夫の揚代。が爰に一つの難澁は。酢の粉のと脱廻り離かぬ太夫を手に入る。方便は件内有るまいか。コレハお旦那手延なお心。金の有こそ幸なれ。身請成されりや思ふ儘。イヤ／＼承知せぬ者抱て寝る。押付業は面白からず。ム、然らば彼が姉女郎に。薄雲と云大利者。彼をお頼遊ばされ。口説かせ御覽なされては。フンコリヤ宜からふと。地主従が。同氣求めし邪智佞奸。點頭／＼打連立彼處へこそは入にける。地跡へ禿が稚兒を。抱か／＼し子傳歌寝ん／＼寝んや。可愛此子を誰がいの。誰が告ねど血筋の縁。彼處を出る薄雲が。それと見るより抱取。乳房フシ脚めて撫按。詞コレ太夫様此乳兒様を懷歩は。誰が見ても此お兒は。勘平様の子じやと云はいな。ヲ、左様云管。彼様に生寫しじや物。そしてコレ見や。早たんなんうして乳斷念。何を見てやら笑はしやる。坊乎いの坊乎いのと。地我兒に餘念詠め入る。折柄人の足音に。ハット驚き稚兒を禿に渡し遠ざくる。此方へ出る早野勘平。見るより太夫はフシ胸撫下し。詞誰じやと思ふて恠しした程にの。是いな勘平様。お前に澤山言事有。マア緩々と下に居て。言事聞て下さんせ。子迄生た二人が中。深い浅いは言迄もない事。殿様今度の御大役。目出度濟だら請出さふ。請出されて侍の女房と云れて見たい。彼兒も武士の世嗣に仕たいと。長ふ短ふ待内に。ノフ聞しやんせ虚嫌惡。筑紫の客が妾に打込。俄に身請せふと云。地請出されたら死迄と覺悟は極居るけれど。お前と彼

の子に別れるが。妾や悲しいと泣涙袖に湛て散花のフシ憂身を。託つ苛しさ。地勘平も更今に何と詮方當惑に。胸を痛むるフシ折こそ有。地轡の親方。馳來り。詞申々太夫様。筑紫のお客が今身請。連て戻れと御意が出た。勘平様も日比の名染。氣の毒ながら是非がない。身請の高は五百兩。金のないのが敵じやと。長ふお悔なされませサア。今じやと。地薄雲を。フシ引立行んとする所を。詞イヤ其身請身共がすると。地後へ直と左平太主従。見るより勘平惘りし。詞ナニ彼方様が。此傾城を身請なされんとな。イヤサ何にも驚く事はない。諸事は某が胸に有。イヤナニ轡の親方。金高都合五百兩とな。金さへ遣れば宜いてないか。ソレ地身の代と投遺金。コハ有難の影向と。戴く金の五包。實にも轡の習ひとて馬のフシ如くに馳歸る。地跡打見送。詞イヤナニ勘平。斯して仕廻ば諸事さつぱり。ナント心に快らん。ハテ何も濟ぬ顔する事はない。二人が中は能存じ居る。コリヤ左平太は粹じやはいや。請出したは添して遣たさ。只今からは薄雲を身共が妹にして。其方が妻女に呉るはさ。何と薄雲嬉しいか。アイくく。是がまあ嬉しふのふて宜物でござりますかいな。實に結ぶの神様は。彼方で有るとは知らなんだ。結構過た兄様と。有難過た男をば。一所に持た手柄者。自慢が仕たいと。地フシよしばめば。ム、詞抑黙て居るは勘平不得心か。イヤ全く左様では。サそふ無くば承知かく。ハ、ハ、ハ、有難ふ存じ奉ります。ヲ、得心ならば兩人に。望むべき一札が有。其文言は。斯縁を組からは何に寄らず。此左平太が詞は。背まいと云事を。燦然と認て呉まいか。ハ、イヤ。地其義はと思案の體。詞エ、是いなア。那方のお詞背まいと逐書事を。何の思案が入事て。逐さらく一筆に。地やいのくも添たさの。心一杯勇將も。迷ふは戀路勘平が。是非なく鹿の命毛も。卒白紙に走り書。卒とフシ認て差出せば。詞ヲ、是て宜く。コリヤ伴内。此一札を其方へ預け置。地畏つたと懷へ。取納めたる折柄に。詞勘平殿。御前が召ます早ふく。ハツく只今其所へ參上致す。御覽の通り火急の主用。地重て御禮申上ん。御免くくと勿々に。フシ足を早めて急行。地左平太重て聲を潜め。詞ナニ太夫ではない妹。一枚の金を費し。苦界を助けた兄が詞。

われ背きはせまいな。ヲ、何々の誓文で。ヲ、先は満足、早速なれど其方に頼み度事がある。アイ。身に叶ふた事ならば。ヲ、叶ふた事だ口説落せ。夫りや誰をへ。小紫を。エ、否と云ば慰しらず。我詞は背かじと。一札は反古にするか。イエ、左様では。サ口説落すか。サア。如何じやと義理詰に。地遁れぬ場合と心を定め。如何にも口説て上ませう。確と詞に違ひはないか。アイ斯云口が腐もせよ。ヲ、出来した。地其旨急度心得よと。早押柄の張臂は。恩を見せたる鼻高々。別れて。雪と散花の。花の雪吹を打拂ひ。詞袖もない事言掛て。聞入られ様もし。と云て恩を請たれば。ハテ地奈何がなと立つ座つ。餘所には知らぬ粉黛の。面も朱に千鳥足。アノ詞縫様とした事が。人の酔のを面白がり。まだ呑めく。て。手も足も韓紅。櫻が意外紅葉なら。鬼の化たと取違へ。惟茂が硯ふまで。ホ、。小紫様。アイ、妾を呼んすは。誰さんじやへ。薄雲でござんす。お前に折入て頼にやならぬ譯が有。一寸下に居て下さんせ。アイ下に居たが何でござんすへ。聞ておくれ。ソリヤ何をへ。ハテ戀を。エ、ヲ、斯計では合點のない筈。據ない譯有て。左平太様に頼まれやんした。近此無心がましいが。二夜共云まい只つた一夜。枕交して下さんせ。否と云んすと妾が身が。勘平様に添れぬ譯。じやに由て頼みんす。一生に一度の頼。聞て下んせ。頼んだぞへ。テモ我折。興も酔も覺切た。知た同士は冷しいと勘平様に添たいも。妾が縫様可愛ひも。替のなはい知てじや筈。いかに姉女郎の功權じや迎餘りな言たいがい。妾や否でござんすはいな。サア其處をどふぞ。否々最ふ言て下さんすな。ム、スリヤ奈何様に云ても。ヲ、煩。そんなら妾も戀の仇。縫様とお前の中も。金輪際邪魔して見せう。アイ。どふ成となされませと。地詞表に散花の。フシ色香捨てぞ立て行。詞那方は道理。此方は無理。無體と知て。頼にやならぬ手詰の難義。戀故死る身は厭はぬ。命に掛て今一度と。地夕紅の襦袢。小棲フシ抱て走り入。地木影を突然高の左平太。詞道理こそ小紫。縫之助めに心中立。戀路の意趣と出掛き成まい。ハテ地奈何乎と繰返す。思案半へ縫之助。詞コレハ、左平太様お一人是に御座なさるゝは。今を盛りの花の景色。三十一文字

の詩の。思召でもござつてかな。イヤ左平太其様な機嫌じやござらぬ。火急に貴殿へ無心が有。ム、御無心とはな。ヲ、此方の相方小紫。左平太が貰ひたい。イヤ太夫が義なりや仰られな。那方の御意でも相成ませぬ。スリヤ。奈何云ても。いかにも左様。ヲ、承引せねば刀鈍て。左平太見事に貰つて見せう。ハ、ハ、ハ、武士の家に切先沙汰珍しからずお相手と。地負ず攪ず血氣と血氣既に斯よとフシ見へたる所へ。地判官駈出弟が襟髪掴み丁寧々。ノフ悲しやと駈出て縋り悲しむ小紫。見向もやらず撥たと覗み。詞色に溺れ酒に長じ。是が一郡一國を知べき身持と云れうか。幼より儒學を好み。大學の頭とも云れんと。常々云たは偽か。朱に交れば赤くなると。善らぬ友に交れば。自然と移る不行跡。七生迄の勘當じや。兄と思ふな弟でないぞ。地立て失せふと愛相もなく苦りフシ切てぞ入にける。地跡見送て縫之助。身の過りに言譯も何と詮方泣入計。小紫も伏洗。兄御様のお腹立。皆妾故に發つた事。堪忍して下さんせと縋付て泣居たる。フシ折柄下部が千兩箱擔ふ跡から急々と。やり手の玉が高聲に。申し／＼お二人様今殿様が私等を召れ。太夫様の身の代金。充分戴き笠の紐結てお二人道。行はお心任じやサアお出と。地勇む人より勇まぬが。嬉しさ餘る兄の慈悲。骨肉に通り有難涙。伏拜つゝ打通て。名残惜けに出て行。地跡に無念と左平太が直許立たる後より。詞悴々。ヤア親父様毎の間に。ヲ、様子は残らず皆聞た。重き勅使の饗應役。請取ながら寄席者僅酒肴の饗應て此師直が頬を張。然ば儕が弟には傾城狂ひの腰を押。悴に恥を與へし鬱憤。地待て居らふと親と子が點頭合て立折柄。幕の内より立出る。鹽治は何の心も付ず。詞イヤナニ師直公。勅使御登城の時節。着すべき衣服の義は。イヤモ長上下か又素袍でも苦しからず。イヤ／＼此義は朝家の大禮。左様に放と仰つしやつては。ハ、ア。分らぬと云しやるのか。イヤモ老衰はせまじき物。矢猛に差圖致すとすれど。分り申さにや是非がござらぬ。向後御指南申すまい。何もお尋無用でござるぞ。營中に事繁し悴。地來れと兩人は。愛相なく移るフシ乗物は飛が如くに馳騁る。地見送る判官頭を傾け。阿れば心を穢す。詔はざれば役義の大事。地如何はせんと肩に雛。思ひ掛なく織部安兵

衛。宙を飛でぞ馳來り。調動使三卿早腰越の驛亭迄只今當着。師直公の差圖として。院使方の饗應使。桃井殿には先達て。既に彼所へ御出迎。地殿にも早く御越有て。然るべしと。フシ大息繼て訴ふれば。地鹽治判官大に急立。調最早三卿御着とな。イテ御出迎奉らん。地馬牽やつと性急の。下知に織部が牽出す。立髪取て打跨り。駒は駿足逸散に宿坊。指て三馬駈り行。

第 貳

地斯て鎌倉建長寺は最も畏き勅使の宿坊。饗應の役鹽治判官。師直が差圖の違ひ。案の外なる手後を。補ひ造る急普請。上塗障子腰張も濕るは火に干焙り。間毎く敷替る疊千疊千餘人。大工入夫が上を下只時の間に仕立は。フシ實に大名の手際なり。地襖開いて大寫文吾。勘平に打向ひ。調夜前より殊ない御苦勞。イヤく夫はお互。御主人一大事の御用なれば動ねば成申さぬが。是に付ても師直殿。此度殿へ差圖の仕方。不埒な義ではござらぬか。成程勘平殿の云る通り。此安兵衛が存るには。曲れる弓に直矢を矧時は。武用をなすと申せ共。眞直な身は反鞘に納らぬ道理。判官様の一直な御心と。曲り曲つた相人の根性。反の合ぬは變の基。何卒今度の御大役。目出度事が納ればと。數なりませぬ某も。イヤ我々も御同事に。地案じますと主思ひ。フシ胸を痛める折柄に。調師直公の御入と。地聲高らかに聞ゆれば。イデ此通り御主人へ。お知せ申そと打連て。フシ皆々奥へ入にけり。地程なく襖荒々かに。入來る高ノ師直。權勢面に顯して。然も緩意にフシ打通れば。地鹽治判官謹て出迎ひ。調普請漸事調ふ。イザ御内見下されと。詞に付て傍りを見廻し。詞ハア壁も襖も引釣引張。繪の具の色も所斑ハテ能出來申た。シテ勅使の進物は。定て御持參でござらうの。ハ、則是にと差出す。地一軸手に取打認め。調何じや照月。フ、コリヤ一休な。ハ、ハ、ハ。追は田舎に小城を持た田夫野人の鹽治殿。後學の爲能聞れい。凡て月を詠するには。照と云ば月を隠し。

月と顯す其時は。照と續けぬは例。僅文字を二字書んとて。外の熟字も有べきを。不自由らしく照月とは。夫程一休愚蒙に非ず。斯師直が云たらば。定て貴殿返答に。歌仙の歌の第十三。水の面に照月なみと詠じたる。順が歌を引召れうが。アリヤアレ水の面に照と詠切。月なみとは月の並を算へし言葉。照月の證歌にや成ぬ。眞赤な偽り物を。献上杯とは不埒千萬。イヤさな宣ひぞ師直公。既に近湖の入景にも。鳩の海照月と詠じ。異國の詩にも照月と。賦せし例も有事と。地打返したる宏才の。詞に挫ず置笑ひ。ハ、ハ、ハ、ハ。中々博學。殿しい物でござる。我等閉口。が理に叶つても。一鉢一衣て日を送る。世捨坊主の書た掛物。官位高貴のお目出たに。献上物と成べきや。地馬鹿な詮議と懸物を。撥と投付荒氣なく。フシ疊を蹴立て入にけり。地思へば無念と判官が。打果さんず焔の而色。短刀寬げ立上る。裾に縋つて織部安兵衛。マ、マ、先待給へ我君。詞重々の御腹立御尤。去ながら。鶏を裂に牛の刀は用ひず。若御短慮の事有ては。勅使大禮の場所と云。御膝下を踏す恐。地何とぞ怒を鎖られ。目出度役義納る様。偏に願ひ奉ると。諫に是非も判官が。踏止まれど無念さは。班々涙兩眼に。玉散計見へにけり。地時に境内賑はしく。勅使のお入と追々に。報せの聲は路樂も。フシ寺門に近く響きけり。詞南無三寶早入御成しか。進物はへ早く。咲と織部が駈入て。地持出る間も奥の間より。小姓が駈出兩手を突。詞饗應勅使何とて御目見延引する。緩急なりと勅使の付々。以の外不機嫌散々。早く御上り遊ばされ然るべし。ヲ、サ只今其所へ參上と申上い。地咲と立間も摺合計。又も小姓が周章しく。詞勅使御下城有て後。鶴が岡へ御參詣用意やと執事のお尋。サア其義も只今伺て。押付是より御返答。早く其旨言上せい。地急げくと。三方四方に氣も胡亂く。胸は早鐘月の間の。櫛瓦礫離と高ノ師直。詞鹽治殿何狼狽。御膳何故遅なはる。イヤ其義は只今支度調ふ夫々と詞の内。二人が取々白木の膳部目通りに直し置。斜目と見道。詞コリヤ何じや。エ、三汁に十一菜。勅使の御膳は昔より毎の年でも七五三。古例古格を改めたは。ナ、ハ、何者が差圖仕た。イヤそりや先達て貴將の御差圖。何が何と致した。此師直差圖した覺ないぞ。我

誤りを人に塗、腹切身代り此師直に爲せる氣か。ヤア。地ふとい仕業と脚に掛。潑度と蹴返す懸盤の膳部亂れて粉碎微塵。フシ睨ちらして入にける。地短慮の判官髮逆衝。汝一討と立上る左右の袖に兩人が。詞サ、御尊憤を散さるゝは。毎何時でも手に入師直。勅使の御前が御大事。地先々此方へゝと。地來がしづに是非なくも引展されて地花は千官を覆ふて淑景移る。今日ぞ勅使を營中に。お能の變應美を盡す。諸侯の登城供廻り斯様に廣き下馬先に。フシ雲の如くに集れり。詞ナント時平。昨日建長寺の宿坊にて。鹽治殿と師直殿。大事が起ると仕たげなの。左様ぞ。此郡右衛門も聞及んだ。フシ師直と云和郎が。日本一の邪者。鹽治殿は短氣の大名。どふて無事では行ぬ筈。斯云内も何様な。變が起るも知れないと。地噂も天の言しむる。前表とフシこそ知れけり。地時に營中騒がしく。切たくと告て出る。不時の凶變諸侯の家來。様子聞より銘々の。主人の安否報知の往來。フシ櫛の齒を挽如くなり。地斯と聞より早野勘平。宙を飛て逸散に走り付たる下馬先に。渦巻諸士を呼留め。詞喧嘩の相人は誰成ぞと。地間ば口々知た顔。詞ヲ、サ相人は鹽治判官殿。師直公に意趣含み。杉の間の廊下に待伏。眞二つに切れたげな。我々共は主人の様子。奥様へ御注進と。地言捨フシてこそ急ぎ行。地聞より勘平氣も狂亂。途方失ふ折柄に。走り駆き薄雲が。申し勘平様。氣遣しい此騒動。様子は如何でござんする。ヤア様子所か相人は御主君判官様。師直に切付給ふと聞計。地心元なき主人の安否。フシ如何と見遣御門の方。地驚坂内。家來引連出來り。ヤア勘平の大馬鹿野郎。儕が主の鹽治判官。叶ひもせぬほど轉合御前を騒がす不届と。網乗物で只た今見るも哀なお預者。身が御主人は疵養生。何と高家の威勢を見たか。汝が女房の身請の金も元は鹽治が賄賂金。師直公へ屈ぬ故それから發つた此騒動。彼の交睫仕た煩わいの。地笑へゝと主従が。一度に嘔とフシ高笑ひ。地勘平は臆腸も熱る計に難言不禮。モウ赦されぬと拔放す。ソリヤ遁すなと群る多勢。振翳して縦横に難立々々。追て行。地跡に怯あいさ氣遣ひさ。足爪立つ延上り。ア、く危いゝも薄雲一人氣を揉後。取て返す驚坂が。コリヤく仕課たと抱付。年來其許にほの字の我等。可愛

かの字と締付る。斯と遠目に馬上の織部。飄然と下立伴内を。一當ウンとフシ反極形。エ、有難い何方様ぞと。問と答ず驚坂が。懷中搜し件の一書。奪取所へ勘平が。馳戻つて顔見合せ。織部殿か面目なやと拔刀。既に斯よと見へければ。薄雲周章獅嘯付。コレくく早まつて下さんすな。マアく待て良人。ヤア其方とは夫婦でない。縁切た。エ、そりや何故に。何の科。去れる覺はござんせぬはいなア。イヤく今件内めが吐すを聞ば。其方を身受せし。金は主人の賄賂の金子。其賄賂が屈かぬ故。今日の此容體。エソヤ御主人の御難義も我々より起る道理。何と生て居られふぞ。腹撥割相果る。地妨すなと突退劔退取直す白刃を織部撥たと蹴落し。詞ヤア斯る主君の一大事。死するは重ねて時こそあらん。是より本國伯州の。大星殿へ此様子。報知の早打急ぎやれと。地死を止たるフシ情の詞勘平濃と心付。偶然らば仰に隨ひて。是より直様打立ん。地貴殿の御馬借用と。フシ飄然と乗ば薄雲が駈寄目先へ扇の關。詞爰稱はずとお行やれ。地潑と答も雲霞飛が如くに 三重へ颯り行

第

參

歌思ふ其許様と添添げふならば。如何な辛苦もヨヤくヨ。おりや厭やせぬ厭やせぬ。諷口々エイサツサ。嗟つさ血駕籠息杖の。音羽に續く谷筋は鄙と。都を腹と背に。大龜谷の立場とて。フシ往來途絶はなかりける。地世の憂はフシ旅と聞しも昨日今日。假寝も一夜二重帯。結ぶ鹽冶の縫之助。馴し。由縁の紫も。俱に當なき草枕。フシ思ひなくてぞ見まほしき。地縫之助立休らひ。詞コリヤく駕籠の者。爰へ一寸下せい。コレく小紫。狹少駕籠で無窮屈些少歩いて見やらぬか。足の痛みは癒かや。ア、申し勿體ない若殿様じやないアノ良人。貴方も私も習はぬ歩路。女夫に成たが嬉しさに。跡先忘れ浮々と。地定めぬ旅に足を損じ。思はぬお世話に成まする。詞何のいの。人に知れた縫之助。勘當請て未々と鎌倉には居られぬと。其場から夜を日に繼て上方へ。來る事は來たれど何所を當途。

大坂へ上つたら心當りは出入の町人。夫さへ委しう名所知ず。ヘテモ奈何なりと成ぞいのと。地しどない詞に小紫。稍打廻る顔を上げ。詞ソレマ其様に取締なふ。地世の憂知らぬお身を持て。御艱難遊ばすも皆私から起つた事。思廻せば廻す程。お最愛はいと計にて又も催す雨曇空にフシ知れぬ風情なり。地駕籠の者つかふど聲。詞ヤモ約束は船場なれど。お極の此立場。爰て酒代をナア庄六ヲ、尾張が言通り。マア何じややら面白ふなお二人連。爛と張込て貰ふわい。ヲ、お前達も太義でござんす。サ。酒でも酌てと。地帛紗より。取出すフシ包井出の露。詞コリヤ片棒。お歴々の奥様から。小粒が僅少コレ二角。イヤ申し今の金の直が大層安いが知てかへ。ナア庄六よ。コリヤまあ何の事じやい。此街道て人に知れた尾張の與助。二分や三步の端金。愚説たと云れては。仲間中へ頬が立ぬと惡體口。地ねれけ功者は薩摩の庄六。俄に作病顰頰。詞アイタ、、、、、イヤコレ片棒乗前の女中の足痛が移つたかして。一足も引れぬはい。アイタ、、、、、是りや最ふ寧そ打投けて往ふかいと。地云を云せぬ縫之助。詞ヤア慮外千萬。極めの外に花は呉る。何が不足て其難言。今一度言て見よ。手は見せぬぞ。ヤア若様はそりや何云やる。酒代を乞は駕籠昇のお定まり。夫に何じやびこくびこくと。反打廻して。ム、コリヤ面白い。切れふはい切れふはい。が今聞て居りや勘當を請たとやら。浪人が人切との。コレ解死人に取れるぞや。サア夫でも大事なか切て貰はふと。地足弱を見越て強請邪神の仕掛。此方は若氣堪へぬ顔色。小紫押鎮め。詞申し是迄とは違ひますぞへ。何事も御堪忍。皆も堪て下さんせと。地支兼たる折も折。鰯ある武士の旅姿。家來も跡に乗物釣せ茶屋が。フシ床几に立休らふ。地此方は性急と二人の籠駕。詞ハテ四も五もない。其方も否なら此方も否じや。へ、憚ながら雲助こそなされ。二分や三步の目腐金。欲くばわこりよに遣そふと。地顔へ爲漫縫之助。最ふ了簡がと立掛る。詞ヲ、了簡ならずば如何すると。地取付無法の振舞を。傍に危々小紫。見兼て此方の以前の侍。武者搖掛る兩人が。襟髪掴んで頭轉倒。起上るを拔手も見せず刀の双背打。劇々撥しと打据られコリヤ叶はぬ。お赦し御免と雲助共。フシ雲や霞と逃歸る。地跡見送つて

縫之助。調コレハ、何方かは存じませぬが、浅からぬ御情。モ御覽の如く足弱連。夫を見込て無法の族。今の慮外御
 救下されし御芳志の段。忝しと。地思ひ入たる挨拶に。調何の、お禮に預る迄もなし。去ながら重々悪い今の奴
 原。シテ貴公には何方へ。ハア私共は大坂へ志し。ム、拙者も今晚伏見で乗船。同じ道筋能お連。サ、是か
 らは御同道。ハア成程左様致したけれど。連し女が足を痛め。外の駕籠でも借まして。ア、イヤ。下賤の者の癖
 と致し。得ては己等が仲間同士。云合せなど仕り彼是妨致すもの。ト云て歩行は成れ難し。ハテ地如何哉と傍を見
 廻し。調ヲ、幸ひく自が釣せしアノ乗物。見苦しけれど伏見迄。夫は餘り不遠慮。イヤく苦しうござらぬ。是非
 共お召。フシ家來お乗せ申せ。是は重々御情。イヤコレ紫仰せに任せ御無心申しや。ハイ。そんなら和理無い
 御無心。皆様御太義お赦しと。地乗間フシ遅しと昇上れば。調イザ御同道申さふか。いかにもお供致しませう。アイ
 ヤ申しお旦那。奈何やら又悪い雲行。途中で降れば大な迷惑。お乗物に桐油する間。暫くお待ちませ。ヲ、サ能
 い了簡。緩々掛て跡から參れ。お若いのお出成され。アイヤ私は此乗物と一所に。ハテ扨際取る事ではなし。用意し
 て引續に。縦後れてから藤の森で。待て居れば是非共參る。地サ、お出と無理無體。手を取々に誘引は。心ならずも
 縫之助。フシ打連てこそ歩み行。地跡にこてく桐油合羽。御窮屈にござりませうと。云つゝ徐々昇上る。夫と指圖
 に下部共。左右の戸口に錠前確固。撒と掛たる細引綱。道は無益し東方元來しフシ道へ引返す。地路へぬつぱり闇雲
 九郎藏。此方の道より以前の侍。ヲ、調九郎藏が太義。ヲ、コレハ標田條右衛門様。お頼の通り件の幻妻。甘々
 と手前でたつた今。ヲ、通手柄。ソレ約束の働ぎ代。コリヤ有難い。ガ申し是をアノ面々に天窓割かへ。サ、
 皆迄言な別に一封。是りやお手前へ。へ、コリヤ忝いは。じやが庄六や與助めは。痛目して合ぬ仕事じや。イヤ
 ナニ九郎藏。エ、まだ其上に頼たいは。今の若者取て歸さば。逆もの次手打倒して。其跡はコリヤ此谷へでもナ合點
 か。アイ宜ござります。したが何ぼ二歳でも。士なら少と手に合まい。仲間の奴等マア四五人。後詰の加勢頼にやな

らぬ。ヲ、夫も合點骨は盗まぬソレ又一封。味いは／＼イヤモそれさへ下さりや。如何様な事でもお望次第。ガ併し爰へ鈍夫が戻つて来て。お前を見た足が付。ちやつと／＼。實に尤然らば萬事失策無ふ。ハアテサテ。此闇雲が呑込かは。氣遣せずと退んせ／＼。地心得しと條右衛門追分、フシ指て立歸る。地跡へ班々雲助共。詞コリヤ九郎藏褒美の分口せうかい／＼。地ヲ、合點と各人に渡し。囁き點頭待とも知らず。心も空に縋之助。胡亂／＼きよろ／＼立歸り。詞ハテめんよふな。コレ一寸物を問ましよ。今爰へ下りて有た乗物は。何方へ參つた。御存ならば教てと。地鈍々聲に闇雲が。ム、そりや此道を藤の森へ行きました。イエ／＼今迄待て居たけれど。彼方へは參りませぬハアテ紛ひのない一筋道。ソリヤモ其方が見外した物で有ふ。モフ遠ふの事じやと。地外さぬ九郎藏此方より。二人の雲助立塞り。詞コリヤ／＼二歳め。己マア最前此方等を。特に強暴めに合させたな。其時の返禮双背打の代り。コリヤ此息枝をと。地兩人が打て掛るを右左。拂ふ間も無法の手込。危く見へし其所へ。伊勢參宮の辰掛夫と見るより天河屋中に分入突退押退擲き退。引擔て投付／＼。後に圍ふて立たる勢ひ。南無三寶と迸出す九郎藏。引摺戻して反轉打せ。起しも立ず踏付れば太痛腰骨撫摩。フシ這々逃て歸りける。詞ヤ申し若殿様。何所も痛は致しませぬか。お怪我はないかといったはれば。面目なげに縋之助。差伏向て居たりける。義平は猶も手を突て。詞云迄もござりませぬ共。年來お出入仕りヤモ厚い御恩。殊に度々冥加ない。御目見迄致しまする私。何はしかれ。思ひ掛ない此お姿。如何した事でござります。ヲ、咄せば長い事なれど。何を隠さふ有様は。我放埒から兄上に勘當請。太夫と二人来る道筋。此所で駕籠昇共。口論仕掛無法の段々。ア、可愛や太夫は何方へやら行方知れず又其上に今の手向ひ。ム、スリヤ彼奴等が言合して。御同道の女中をば。エ、そふ云事なら引捕へ。地程は行じと駈出す。向ふの道よりエイ／＼エ。サツ／＼サ。聲も鬧しき時切早打。宿次駕籠に細引の。手綱にエイ／＼數百人。使の武士は白木絹。腹巻確り鉢巻の。顔は正しく。詞ヤア織部安兵衛何事成ぞと。云間もなき。地矢を射る如き早使。フシ伏見を指てぞ急ぎ行。詞ハテ心

得ぬ家中の早打。本國へ急使。眞に誠に織部様。地如何なる凶事と胸騒。縫之助は心も空。詞夕邊と云一昨夜。旅宿の泊りに夜中の早打。何國の事ぞと思の外。我家國の一大事。地それも氣遣ひ此方も如何と。立たり居たり。狂氣の如く。義平も俱に氣は半亂。詞何にもせよ常成ぬお家の大事。火急のお使。コリヤ斯しては居られませぬ。何て有ふと大坂の。お藏屋敷で委細の様子。サア夫もそふなれど。今紛跡た太夫の身の上。成程左様でござれ共。先當る一大事。手延にならぬお家の様子。ヲ、そふじや。貴方は暫く都の内。幸ひ縁有井筒が方。私めは片時も早ふ。お國へ駈付何かの子細。イザ御出と勸めても。地妹背の別れ立兼る足も四度路の山道を。肩背に掛て介抱の。誠も深き天河屋。義平を便り力草述て都へ三重急ぎ行

第 四

地岷輪の璞玉は磨して然ふして輝き。廢國の英雄は豫め後に強たりとかや。伯州鹽冶の城内にはお家の訃音聞し。諸士の評定日を重ね今日も寄合ふ大廣間。在國の執權職大星斧の兩家老。其外烈座の一家中詰所くに残りなく。夕邊を待ぬ蜉蝣のフシ露の命を哀なる。地並居る中より竹森喜多入。會釋もなく突と出。詞此比三度五度の會合にも未だ何條極らず。元來由良殿の仰出されし如く。いかに鎌倉の御意なれば迎降々居城を渡さふか。上使を引請桶籠り。矢種玉藥の續かん限。討死致すが肝要と。胸を据たる我々なれば。此如く武具具足まで用意致した。サ此義一決下さるべしと。地席を打たるフシ廳の詞。地頭を打振て斧九太夫。詞ハレヤレ如何に若い迎疎忽千萬。鎌倉殿に弓弾んなんどは。夫りや銘々が勇になみし。血氣に狂ふ妄言と云物さ。其評議廢止に召れと。地言せも立ず郷右衛門。詞ヤア大祿と用捨して。此程より詞を控へ沈黙て居れば。又仕ても又しても家中の心を惑はす詞。我々は身命を抛ち。寢食さへも打忘れ。只亡君の御無念を。散せんと思ふの外はござらぬわいのふ。夫に何じや延氣くと。人

氣を迷はし評議の妨。如何にとしても吞込ぬと。地云に竹森實誠。詞是迄に數度の會合。臆病風に誘はれて逃退人數百餘人。まだ此上に不忠の奴原。幾人滅ふも知ぬ鹽梅。所詮此上は行掛の駄賃とやら。臆病未練の奴原は片端から捻首して。腹搔割が捷道と義を金石に固し勇士。九太夫は詞なくフシ一物有氣な煩魂。地大星暫と押止。詞ヲ、一圖に逸るは尤なれ共。斯る大變の期に望み。伯州武士は血迷ふて。同士打をせしなど、後人の嘲恥かし。尤某も鎌倉の討人を引受。城を枕に討死とは存じたれど。是逆も詮なき事。殊に斧殿の詞の如く。今劍戟を振ひなば。上を凌ぐの汚名は通れじ。只此上は主君の御供。殉死せんと一決せり。某是より神文の。誓紙を以て事を定めん。各同意の旁は一刻も早く。コリヤ力彌用意の品早是へと。地父が詞に差出す一卷。良兼取て爽々。性名認め誓ひの血判。ソレ何れもと詞の下。我もくと一味の武士。取る手遅しと誓約を。能田の錦時ならで。染なす紅葉唐紅。暫時をぞ三重に移しける。地追手御門の下馬先を。一騎夕陽旅姿。出る寺岡平右衛門。心も空に駈出しが。振返つて御城の方。打詠め。班々落る。フシ名殘の涙。詞所詮悔んで返らぬ事。今侍部屋で様子を聞け。彌殉死と窮る評定。お歴々には切腹召れ。殘る奴輩は皆腰拔。然すれば誰か君の爵憤。仇を報はん族も有まじ。足輕風情の已なれ共。實ては御無念請繼で。煩見知りぬを。幸に鎌倉へ立越。師直が屋敷へ入込。時節を伺ひ汝やれ。忠義の念力只一討。若又奉公叶はぬ時は。屋敷の邊に徘徊し。登城下城の折を考へ。乗物に飛付ても恨を晴さて置べきか。譬此身は寸段。刻れても。夫社は身の大廳。左右じやと。地身繕して駈出す。不敵にも又三重頼母敷し。地城内には間毎。各同意の諸士が血判。大星力彌郷右衛門。連判携へ九太夫に打向ひ。詞コレサ御家老。錄の高下家柄を申さば。先一番に御邊から何れ差圖も有べき筈。夫に却て血判さへも延引召る所存の程如何にしても吞込ぬ。但しは外に御存心でもござるかと。地迫詰掛れど少も動せず。詞イヤサ殉死の評議拙者其意得申さぬ。虚々腹切死んよりは。ム、ンすりや籠城の討死を。好まるゝ御所存か。イヤサそれは上への恐れ。シテ其外に所存とは。サアそれ

は。サア——何とてござる。ハ、ハ、ハ、ヤ燕雀何ぞ鴻鵠の志を知ん。自が胸中が聞度ば。某が屋敷へお來やれ。討死じやの殉死じやのと。極にも立ぬ長評定。まだ——聞ては居申さぬ。コリヤ——梓定九郎。其方も斷然屋敷へ歸れ。早く——ア、イヤサ何親人。某義は由良殿に。同意の血判仕る。ム、ソリヤ又如何して。イヤサ何で有ふとお構ひ成れな。何事も某が胸にござる。イヤサ胸は先程から据て居と。地連判追取確實と。血判すれば判れ顔。詞スリヤ儕迄が其血判。ヲ、夫程死度ば勝手に没爾身共は歸ると。地空嘯き。睨放して九太夫は己が屋敷へ立歸る。地跡打見遣郷右衛門。同サア違變の者は大方知た。残るは我々義を知つて。武名を天下に顯す忠死。一刻も早く御用意——ホ、逆も今宵は過ぎぬ命。心靜に辭世の一句。思ひ——に述らるべし。某親子も冥途の門出。又何れもは屋敷へ餘所ながらに暇の使。言遣られて宜らふと。詞に皆々卒尤。然らば後刻と立別れ。詰所へ——フシ入跡に地定九郎は突直と。何か點頭此方の一問。出る新庄源四郎兩人伴ひ座に直り。詞コレサ定九郎殿。改言には及ばね共。是に居召る川村傳藏奥野軍兵衛。斯申す某逆も貴殿御親子同意の我々。兼て不和なる由良之助が計ひ。殊更今度の評定は。一から十迄附に合ぬ事共計。去に依て銘々共別に所存を申合せ。諸事腹心に談じ合某。それに何だ御親父に檢違。其元一人血判召れ。彼りやまあ奈何云てござるな。ム、様子知ねば不審は尤。同意と見せて血判せしは。跡に残つて一つの方便。コレ見さつしやい御金藏の戸前の鍵。夙に窃占た某が。所存の底は。地ナコレ斯々と耳に口。ム、ソリヤ今宵七つの鐘を相圖に。シイ出合ふ報知は此呼子萬事失策なき様に。ホヲ、通妙計お出來なされた。サア何角の手筈は違はぬ刻限。地氣遣有なと示合。欲と不忠に固の詞。直ては行ぬ横玄關。打連外面へ定九郎は襖引立入相に。別れを告る夕嵐。フシ遠寺の鐘の更々とフシ彌増哀や荒らん。地奥の間には由良之介。早殉死の刻限と。君の位牌を佛前に。恭く据奉り。御座の左は御臺所。秘お末に至る迄。露なき花の霜咲。諸士も左右に列座して。生るが如き尊敬に。彌奉る伽羅の香のフシ薫る甲斐なき手向かや。取次の使番罷出。詞御家中の奥様方お

袋様方執様にお暇乞有度由。玄關迄お詰成れしが。是へ通し申さんやと手を突げ。一座の面々詞を揃へ。斯一決せし我々なれば夙に皆々云聞置。名残杯とは且以て。一人も叶わぬと。地烈しき詞に奏者番何とフシ答も引返す。地又も一人遽しく。詞竹森喜多八様の御老母。何か別に子細有よし。達て通じ申せとの仰。殊更亡君の御説有との御事。如何計ひ申さんと。地云に大星。ソレ早く。是へ通せ。ハット奏者が高聲に。森喜多八様の御老母には格別の御事なれば。御入有て然るべし。其外の御方は早々屋敷へお歸りと。呼はる聲を洩聞玄關。ハア潑と返す詞なく外面は。フシ叙と鎮まりぬ。地愛事の重る老の悲しさに。包涙も先立て。に健浪の立居さへ。フシ力なく。畏る。地竹森喜多八手を仕へ。御老體の別涙も嘸かしと思量。態と屋敷を出る時。御暇乞も仕らず。今將御目に掛る歎き。心強くも思し切遊ばされ。拙者が義心立させて給はるべし。地不孝の段は幾重にも。御用捨成され下されと。立派に述る詞さへ。フシ跡幽なる計なり。ホ、言迄もおじやらぬ。此母は其方に暇告には來ませぬ。先以まして御前様。此程より嘸無端ふ思召給はんが。迎も宿世の成す事と御諦め遊され。地お心強ふと詞數。云ぬ誠にかほよ御前。詞ヲ、嬉うござる其方の深切。言て返らぬ事ながら。地推量仕やと云殘て。恥る人目も武士のフシ習ひは。愁氣憂涙。地郷右衛門老母に向ひ。何れに愚はなけれ共。其元には取分て蒙君の御最期故。嘸や歎き思すらんと。地云共何の答へなく徐々と立上り。フシ携持し。包より。取出す小袖。恭く。君の位牌に打着せ。抱上。思はず涙班々と。稍伏沈む計なり。地漸に座を改め。詞イヤノフ由良之介殿始各方も是見給へ。此お小袖は我君の御産着。御定紋の一つ身。思ひ廻せば冥加なや。勿體なくも此媼が。乳を奉り參せて。地朝夕抱き育しも今ははかなき二むかし。世の成行は是非もなし。詞去年の秋の御發駕を。見立申せし其時に。隨分健てコリヤ乳母よ。頓て逢ふと宣ひしを。地思へばそれ。が此世の名残。御面影が目の先へ。今にちら／＼見る様な。何と是が忘れられふ。未練なば／＼やとかんならず笑ふて。ばし下さんなど。又も位牌を抱上。詞ヲ、久しぶりて乳母にお抱れなされたのふ。思へばはかない不慮の御最期。嘸

御無念にござりませふ。御他界の其日より。晝夜わかたぬ家中の評定いづれの道にも一命は。君に捧ずし各方。わらはも何と存命ませふ。追付未來で御目見へ。同じ冥途へおくれぬ御供。地武士の常とは云ながら。我々のみか一家中老たるを控妻子に放れ。はかなの身やと聲限り。堅き老母がくり言に。一座の諸士も目に泣で。我身々々の妻や子が歎きを思ひ世を吒。百千の石火矢にもやはか屈せぬ魂も。暫し蕩る忍び泣。老母御臺は取亂しかはり果たるお姿やと。位牌にひし抱付前後正體泣叫ぶ涙。はてしも播磨灘潮。彌増思ひなり。地やと默然たる由良之助。心有げに御前に向ひ。詞とくよりは是に控へし諸士は。爰に鍛に鍛し義臣。何條變ぜぬ丈夫の魂。今宵殉死と決せし折から。今の老母が歎きに付。心ひかるゝには候はねど。地參存ずる旨有ば一先下城仕りめい。屋敷へ立歸り。妻子にも暇乞。詞八ツの時計を相圖となし。再び登城なさしめ申さん。先それ迄は御前様老母諸共御療所へ。ヤ何旁是ぞ誠に死出の旅立。黄泉の首途成ぞ。迎も君に捧し。一命翌は則上使の御入。官便を引受一防ぎ仕るか。又は手もなく殉死せんか。恐ながら御前の計らひ。幸飭し貝鉦太鼓。討死と極まらば此太鼓。又殉死と極め給はゞ。陣鐘を打給ひ。諸士を再び集る報知。各此旨御承知有れと。地聞も敢ず郷右衛門。詞イヤ。斯迄堅る一味の輩。何しに未練の暇乞。討死する共腹切共。只此儘にて籠城せん。地ヲ、我々迎も其通りと。フシ座したる疊動かばこそホ。詞健氣の覺悟祝着せり。左程定りし各の義心。暫時の歸宅留別に。争か變ぜん様はなし。其魂を見拔し故。斯は計ひ申なり。只旁々と論は無益。某先へ退出せん。各は片時も早く宿所へ歸らるべし。地再會は丑の下刻最早亥も過ぎ子に移る。後刻くと由良之助御臺所へ一禮し。力彌諸共立出れば。心撓まぬ一家中義を張弓も力なく。フシ共に別れて出て行。地跡に御臺は物案じ。暫落れて御座せしが。ノフ。詞心得ぬ由良之助が計ひ。昨日迄も今日迄も定まり難き評定漸殉死と極まりしを。又も違へて今の舉動。殊に又自に。何れと成共極よとは。不審差圖。一家の評議でさへ。極まらぬ人情。奈何自が計はれふ。ヲ、コレハ御臺様。何の御案じ遊ばす事。思慮違しき良金殿。定

めし何ぞ深き様子。有ての事でござりませふ。地まだ入つ迄は餘程の刻限。先夫迄は帳臺へ。暫はお寄遊はせと老女が勸に是非なくも。フシ通て一間に入給ふ。地玄關廣間沓々と隈々闇き灯し影。廊下口より由良之助。立歸つて傍を見廻し。扇を持て具足櫃。打は案内と蓋突明。内より出る天川屋。フシ遙下つて平伏す。地由良之助異義繕ひ。義平殿嘸窮屈に有つらん。サ、先々是へ。先刻よりの一部始終。ハア、委しく彼所にて承りました。扱々々大義を計る御家老の。思召は又格別。ヤモ驚き入たと申さふか。先の先迄見通す明智。其明察て有難い。私風情が魂を見込てとのお頼み。此身は愚天川屋が家にも身にも餘る大恩。少し成共報じますは今此時。ホヲ、其心底を察せし故。夙に明せし我本心夫に引替家中の面々。日毎に替る。心々迂濶に大事は明されずと貴殿も態と忍ばせしぞ。猶も諸武士の狂はぬ義心。篤と様せし其上は味方を訓練し思ひ立たる大義の根據。始終の手配萬事の用意拙者が屋敷で申せし通。夫よりは先今宵頼入度一通り。御臺所を乗物にて。老母諸共裏門より。御菩提所花岳寺まで路次の警固頼入。ハツ、何が扱。ケ斯な事の御用にこそ。數なりませぬ私に。勿體ない厚いお詞。ヤモそつ共氣遣ひ遊ばしますな。ホ、萬事宜しう委曲は跡より。然らば此儘お暇と。地詞も心奥島の。袴の裾も幅廣庭。フシ御寢所指て立て行。地時分は宜と大星は。掛たる陣鐘喚鐘を相圖の打立五三の刻み。草木も眠る丑始刻四方に響き凄々たり。聞間遅しと義臣の銘々。宙を駈つて馳付。殉死の報知に着到と。混フシ々々居並んだり。詞ヲ、約を變ぜず早速の入來満足せり。去ながら。先刻再び歸宅有と遮つて勸しは良策が一つの計略。彼陣頭に簫を額。寄人に故郷を慕はせし。張良が故事を思ひ出したる今宵の時宜。竹森氏の老母こそ。亡君に乳を奉り御養育せられし人なれば。取分て別れを惜み。歎かれんとは誰しも心の付所。扱こそと内意を以て城内へ呼寄しは。某が方便。案に違はず老母が繰言。聞各を窺ひ見るに。親や妻子に心引る。愛着表に顯れたり。夫故辭し旁を。押して返せし其時の。人數は凡百餘人。今又殉死の報を聞。馳集まつたる着到は。漸四十餘人に過ず。併是こそ一人當千。ヲ、頼もし。斯迄銳

き旁の胸中。何かは以て疑申さん。今こそ願す我本心。未來の主君に仕ん爲。殉死致さんなどとは大丈夫の爲さる所。一先故なく城を開き。地思ひく姿を省し。敵師直を討取一條。都に近き山科は此身を隠す假の宿。忍びく術を爲ん。地各如何にと大器の裁配。満座の諸士は詞なく。今に始めぬ大星が。智謀をフシ感する計なり。地血氣の竹森續々小躍り。詞ホ、面白し。左社とは存ぜしかど。日毎に空なる連變の會合。ヲ、我迎も其通り。荷も由良殿と。思ふに違ふ度々の對談。地斯御本心聞上は。時日を移さず君の讐。敵師直が白髮首討取ん事案の内。ハツハハ、有難し嬉しやとフシ雲にも冲る其勢ひ。地今ぞ開くる胸と胸。明る障子の隔の一夜翌は。館の名残ぞと。思へば霽る袂袂。いとど身に入夜嵐や。早更。渡る皐月空。月も哀れに行黒き追手の松影惘然と。立展たる平右衛門思フシ有氣に手を拱き。詞こりや奈何有ても今一思案。能々思廻す程。由良之助様に限り。深い望がなくては叶はぬ。己風情でさへ敵師直。此分ではと思ふ物。兼て思慮有る大星様荷も安穩で敵をば。ムウコリヤ何でも様子の有そふな事。殉死と仰出されしは全く心を引見る術。諸士の魂見拔ぬ内は。無差と本心明されぬは御尤。そふじやく何分誠の御評定。承はつた其上で。左は云漸足輕の身の上。是ぞと云功なくては。迂濶に大事は仰しやるまい。エ、奈何したら宜ふと。地才む彼方に潜々人音。木影に隠フシ忍ぶ共。地知では行ぬ黒裝束。囁き點頭追手先。相圖の呼子吹立れば。御門の内より定九郎。ヲ、詞何れもか待兼た。サアく皆々早ふく。地心得三人刺足拔足。忍入間も寺岡が。サア仕て遣た能手柄と。猶も伺ふ間もなく。銘々運ぶ千兩箱。追手の下馬先御門前。フシ見上る計に積上たり。地定九郎は聲潜。詞是からは此金箱。残らず屋敷へ運んでお呉りやれ。然らば貴殿は。イヤまだ外に當家の系圖。是を竊取て跡から歸る。地旁早くと云捨て又も御門へ。フシ忍入。地イサと三人立掛る。詞ヤア何所へ盗人輩。一人も動くなと。地大手を廣げ杉ばへを。後に圍ふ寺岡に。恠三人進退死身。ヤア有無を云せず仕廻て遣んと。各自に拔連切付るを。心得捷徑の寺岡が縦横上下の太刀筋交し。右と左へ空竹大袈裟。切込む死骸は堀の内

フシ心地能りし有様なり。地御門の内にも烈しき太刀音。シヤ氣遣しと見返る内。大星力彌定九郎。外間追問御門前。通れぬ背門際鈍の請大刀。程よく付入力彌が手練。諸足難れて眞伏向。起しも立ず足下に踏へ。首をフシ撥しと打落す。調ヲ、連れお手柄力彌様。荷擔の奴輩残らず成敗。ヲ、出来したり平右衛門。最早何宵も寅の刻。シテ積上し御用金は。ホ、ヲ領分の町人共銀札残らず引換の刻限。只今詰よと申渡せ。ハア。行やれ

第 五

歌好た秋草何々。朝顔葉鶏頭無子。刈萱澤瀉龍膽桔梗秋海棠芙蓉吾木香。薄黃菊草薺盤梨荻萩女郎花。斜曲とし
たひ廊町客の全盛金銀の。力に夜も晝と成萬燈照す。大寄に。フシ笹屋が内ぞ賑はしき。地奥から仲居が口の間へ。
出合頭は眞圓天窓ヲ、お坊様方。お早いと云たいが遅いお出。龜鶴秀野小作を始。藝子様方は稠密揃ふた。お前様
方のお仲間も離れ座敷に三十人見へてじゃぞへ。ハ、ア澤山に來て居るな。坊主天窓もそふ揃へば見事有。ム、夫
なら今夜開のある歌の外題じゃ迄。ソリヤ何故に。ハテ座頭氣色じやないかいな。ハ、ハ、コリヤおしげ。邪亂く
云ずと年寄の相辯間と仕て呉い。ソリヤ何じやへ。ハテ伴へと打笑ひ。地目代頼めと足取は採り廻つて奥へ行。
フシ祇園町から此里へ。岸の次郎三が介抱も。所縁の鹽治縫之助先に。歩めど抄取らず。足痛氣にも見へければ。調申
し。何とお足が痛ませふがな。それで私が内から駕籠に成されませと云物を。サイノフ私も左様仕度つたけれ
ど。餘り世話に成のが氣の毒さ。コレハ扱。其心遣が此方は氣の毒。冷淡茶屋商賣こそ致せ。岸の次郎三と名をしら
れた私。好の三味線彈掛て下さる。天川屋の旦那からお頼の那方様。お世話申さいで何と致しませふ。それはそふと
彼お尋成るゝ女中の事。色々と諸方を聞合して見ますれど。知惡うござりますはいの。サア去年鎌倉より登る途中に
て。暁と太夫を奪取れしが。若其時の奴輩が。人商人て有たなら。可愛や太夫は遠國へも賣渡され。仕馴ぬ苦勞を付

て居るで有ふかと案じ暮すも恰度一年但しは零落しを見限て。何所ぞに穩密樂んで居りはせぬかと心の僻。憎ふも有。又可愛ふも。地有様は現て暮すと涙啼。地内から見付る女子共。調ヲ、縫様か能お出。次郎様は遅ひお出じやな。お前故に座敷はやくたい。歌開きに手を付た。肝心の先生が遅いとて。夫はく由良様の強。疳。癩。ヲツと合點最ふ行ぞ。イエく最ふては濟ぬ。お二人ながら座敷へ早ふサアお出。イヤく由良之助に吾は逢悪い。小座敷から聞て居よふ。次郎三は早ふ奥へ行きや。ハイく左様ならばと云内も。地開し仲居に急立られフシ二人は別れ入にける。地時雨くが染盡す照葉の小枝銘々に擔げ。させもが露華。濡た姿のお部屋様。歩路行めば暮て行秋の。便や長岡の紅葉狩して漸と笹屋が。フシ許に歸らる。地實盛役の小林平八くわを吐して失聲。調ア、長岡から二里餘りを。しつかい祭の遷衆同然。飄々と付歩行も。主命とは云ながら馬鹿な詮鑿。コリヤ仲居輩。誰有ふ高の左平太様のお部屋付。鬼神も怖恐るゝ朝比奈の三郎が後胤では無れ共小林平八。此度有馬御入湯の次手。是に御座るおさみの方様をお供申此遊里に數日の逗留。冥加ない事だと思へさ。夫に何だ此間からいけもせぬ木の葉玉餘魚だの。イヤ鱈子のと。干物ものに飽果たはい。今日からは何成と肉づくめの馳走を仕居らふ。身共に當りが悪いが最期。爲にならぬが合點かと。地土氣離れぬせんぶり客。苦い詞に藝子の操。ヲ、野夫。其様に熱云すと。少と愛氣を持しやんせノフお幸殿。サイナめんやう藝子様方や仲居を苛待辨慶根性。其様な事云しやんとすな甲州壹歩と異名が付ぞへ。ナンダ身共を甲州壹歩とはエ、聞へた。性が善と云ので有ふな。イエ何所へ遣ても頼と行ぬと云事じやはいなア。此奴がく。諸侍を嘲哂ひろくか。サア。今一言吐して見居らふ。地音骨切て切下ると。鐙打叩けばおさみの方。ヲ、時代やの其様に四角四面に見せ掛ても。爰に居る此操に。其方惚て居やろふがの。イヤハヤ是は存じ掛ない御詞。弓矢神にも照覽有れ。且以て左様の覺は。イヤく。無とは云れぬ是此文。操様まいる。思ひに繋る小林より。卒度拾ふて置たぞや。ハテサテ是は迷惑千萬な。イエく左様は脱させぬ。夕邊も廊下のくらがりで一度ても大事な言事聞て呉たなら。

市松人形に貴様と己とが紋付た。衣装も一所に誂へて。頭の道具も望み次第。買て遣の何の彼のと空可慰い事のあり條。コリヤ。藝子めつか。と何吐す。身共は一切覺はないぞ。地覺へないぞと白眼でも。小氣味の能に仲居共。調ヨウ。思ひに繁る小林様。ア、是りや。最宜わいい。地是じや。と縮々舞。フシ眞面に成てしよげり入る。調ホ、。アノじゆつなそふな顔わいの。夫たが。色事せぬ男は。玉の盃に底がないと兼好主の面白言方。折角心を盡しやつた此文。其方へ戻して遣程に。直接に口説て見やと。地粹な捌にいきり出し。調サア。お赦しが出たからは天下晴た此色事。否でも應でも叶へて貰はふ。藝子に情はない物かと何とやら云古書に記して有ではないか。此間から夜の目も寢ず。平八が骨髄を。盡した此艶書。コリヤ好返答を仕て給ろと。氣味合もなき平口説。忌嫌者を懷へ。捻込濡文濡縁先。地障子隙より縫之助差覗き見て悔りし。調ヤフアリア小紫。奈何して爰へ此體はと。地嬉し懷し人目も恥ず。駈出る顔をおさみの方。見るより是はと飛立思ひ。確と對て。調ア、コレ。遂に逢た事もない人。其方は誰じや。エ、コレ太夫。吾じやはいのふ。アレまだいの。馴々しい物の言樣。エ、聞へた是りや人違へじやの。イヤ。何の違はふ現在二世と云交した。サア偽も眞も有のが世界。頓と此方に覺はない。知ぬ。知らぬぞや。知らず知られぬ中ならば。歌地浮浪まいもの去とは。ホ、。フシ笑止な人と紛らかす。地勃と急立縫之助。詞みす。な其詞。様子が有ふ。サ、。様子とは。地駈寄る中を隔る平八。調ヤア。敷の中から放とした事吐しあがる毛二歳め。當時鎌倉の出頭第一。高の左平太様のお部屋に向ひ。慮外吐さば手は見せぬと。地聞より猶も逆上し。調ヤア。扱は。世になき我と見限り果。榮耀榮花に眼が昏左平太めに隨ふ。儕マア。其根性とは露知らず。今迄迷ふた此身の愚さ。地生畜生め人外め何として腹直んと。胸も膨裂口惜涙。フシ見向も遣ず。調エ、聞へた。扱は深ふ云交した人に。別れての色氣狂じやの。コレ平八其儘にして置やいの。イヤ餘りと申せば悪い雜言。宜わいの。高家のお部屋と云れる身が。兎や角う言程家の名折そふじやないかと高

ふ吹。地風に逆立氣は半飢。最ふ了簡がと腰刀拔手を駈出止る次郎三。詞マア／＼待た。イヤ／＼。最前よりの悪口過言。堪袋も破れ被れ放せ。イヤ待た／＼。エ、放せ／＼とフシ急切たり。詞ヤア赦し置ば付上りのした泥坊め。揺し上て屋敷へ引と。地駈寄平八次郎三が止め。イヤ申是りや牽頭持てござります。然も突出しの音八と云牽頭持。フシ牽頭じや／＼。ムウ何が其身振は京辨屋が仕た八郎兵衛か。是は仕たりと云お客の機嫌じややら知もせず。減多無性に張込て動るとは。ア、前先が見へぬへ、若い者と云物は。マア御覽じて下さりませ。イヤサ如何様に陳じても。合點行ぬ其野郎め。引捕て詮議を遂る。サ、其處でござります。那方に覺のない事を混付るのが色里の黒洒落。先刻からののは皆お洒落じやわいな。ちやりが過ると。得て喧嘩に成たがる物じや。お客の機嫌を損なふて。行燈消れぬ其中に。又折を見て勤たが宜さそふな物。ナ合點か／＼。申しお客様へ何事も御了簡に預りますと。地ちやりにこかした其場の縫れ。解どとけぬ縫之助。清だ井筒が無理遣にフシ連て勝手へ行跡は。地寂寞た座敷を藝子の操。詞サア／＼仲居様方淡泊と吞にせうかいな。ヲ、宜らふ／＼。其紅葉を爐に折焚酒温めて夜と共に。咄さふては有まいか。コリヤお部屋様御趣向じやと。地機嫌とり／＼取巻てフシ訕訕奥へ入にける。地門から遅々差窺ひ。眼光らす無頼／＼共。詞まだ往におらぬか。ヲ、まだじやと。井權助虱の久。爰へ／＼と小助を招き。詞由良之助めを屠んだら。薬師寺様から褒美をせしめる。吾は坊やに構つて居るわは何所ぞに隠れて眼張。去る所を知らせに來い合點か。地合點と云合せ。フシ出口の方へ急ぎ行。おさみは夫に眞實を告知せたと附々の。フシ人目の數寄屋立出て。尋廻ると白紙の。生死危ふく後より。肩先四五寸縫之助非力ながらも切附れば。驚きながら振返り。其儘袴と抱占。詞ヲ、／＼／＼お腹の立は尤でござんすわいなあ／＼マア／＼待て下さりませ。云譯が有わいなア。ヤア聞事ないと振放し。地又振上れば飛退て。詞サア／＼。心を鎮めて一通り聞て下さりませ。妾を奪ふた侍共は皆左平太が廻し者。威しつ宥しつ口説るゝ其愁氣さ。口惜いやら悲しいやら。直に自害と思ふたけれど。イ

ヤイヤ／＼惚て居るこそ是幸。帶紐解て身を任せ。ヤア聞も中々腹立やと。地怒りの刃切先へ一卷縊と差付て。コレ是を見やしやんせ噂を聞ば兄御様の。お腹召したは皆師直が所爲とやスリヤ敵討の思召は是非有事。どふぞ御用に立たさに。穢はしい事なれど。此身を任せたればこそ。地敵の様子屋敷の案内。曲者見付た動くなと。駈出る平八切込刀。心得たりと切結び。氣配り目配り屋敷の繪圖。詞表は高辨擧門。丁ど。地打合付廻し。折廻したる平長屋。詞ソレソレ向ふに遠侍。ヲ、合點と白刃を劔。馬屋は馬手にめ場は弓手。迂回て付入是支關。南を請太刀たち／＼。追つ捲つゝ手練の奥。寢所へ渡る長廊下。渡合たる根比。何なく切伏縫之助。フシ一息はつと繼あへず。詞ホウ出来した女房疑ひ晴た。エ、疑は晴たかへ。地嬉しや／＼忝い。此身を汚した言譯はコレ。此通りと落たる刃。取手を確と押止め。詞其方目害する時は此場の様子洩聞へ。却て本望覺束なし。イエ／＼夫ても平八を切殺したら。再び去に住なれぬ此身。地放して殺して下さんせ。ヤレ。詞早まるな。イエ／＼去ばでござんすはいなあ。歌餘所の去ばも。猶哀にて。埒も中戸を明る東雲ちろ／＼目。ヤア。詞其方は由良之助。ヲツト助てゑす。助は助ける大事の命。拾ふた狀で身の言譯。男に立る女の操。其操を逆様にト反して讀すは洒落た奴。／＼。ヲ、コリヤは平八が藝子の操へ遣た文。みさをと書し此假名を。下から讀ば。ナントおさみの御方と云。儕が主のお妾様に不義を言掛聞ぬとて。手疵迄負せた奴。手討にしたはコリヤ尤。證據は則ソレ其文。死ぬるに及ばぬお歸りと。地態としどろに纏れ舌。フシ酒に言する其所へ。地お迎ひなりと昇込乗物。おさみは死骸に乗掛り。詞不義言掛た小林平八。今手に掛るを其方達も篤と見届置べしと。地くつと止めを刺置て。手疵厭はず悠然に。乗物はへとフシ乗移れば。詞ハテ面白のお相客。粹傳授の此一巻。通大切ナ牽頭の音八。コリヤ／＼次郎三早ふ來い／＼。ソレ其牽頭持様を。我等請出し奉り。其方に急度預けたぞと。地心の丈は詞にも盡ぬ三世と二世の縁。名殘惜いは暫しでも打解。語りし旁に。又逢ふや逢まいやら。必未來で／＼と互に。見交す暇乞。離れ難さを心なく。早昇出す乗物に涙を。乗て泣々もフシ別れ

行こそ哀れなり。詞サア／＼吾も去るぞよ。来いよ／＼。地と立上れば。ソリヤお立じやと藝子共。法師仲居が斑々々。コリヤ。詞毎にない早いお歸り。ハテ早いやら遅いやら時さへ撞ぬ撞木町。大門口迄送れ／＼。送る姿の九重帯歌解てほどけて寝亂髪に。つげの黄楊の小櫛もさすが涙やはら／＼袖に。露の便の憂勤。翻て袖に。こぼれ袖につらき。便の憂勤。大門口から以前の悪者三人組。行違ひ形挑灯を。蹴飛す無法に仲居が悔りびつしやりと。座頭天窓も張合なく皆散々に逃て行。土めを貰へと双方より。フシ右往左往に立掛れば。地折しも來掛る寺岡が。何の論議も投退投退蹴飛せど。夫にも懲ぬ悪徒共。武者振付をちよこさいなど。傍りの泥田へ打付投込大星を。肩に引掛逃散に我家を指て 三重へ立歸る

第

六

地世の憂伏見街道に。扶疎の軒は寺岡が住む月内へ漏次第雨が。涙か浸々と。結目も締る竹實の子。掻集めたる思ひ草。結ぶ夢にも現にも。夫の歸り松の風。門打萩に起されて。折焚柴の煙さへ。フシ絶間勝なる詫しさよ。地疊が中にも子を思ふ親の心は鳥羽玉の。夜の物さへ荒筵の屏風押退。詞コレハ仕たり。此様なわんぱくな寝様が有か。辨なき心にさへ今の暮しが苦に成やら。判然細つた事はいの。何に付ても思はるゝ。お主様の御恩程世に有難き物なしと。冥加忘れぬ。涙寢顔へ飄然掛り子の。平吉は目を覺し。詞母様私も最ふ起やふか。ヲ、賢い／＼。實には昨日父様の土産の歌賃と。取出す折敷椽放れ。角行燈の燈火も。消す東雲。鳥よりも早き足輕平右衛門。背に確與大星を。助て歸るフシ我家の内。詞ヲ、此方の人戻つてか。そふして誰やら負て迄戻らしやつたは心得ぬと。地不審立寄見て悔り。詞是はマア／＼思ひ掛ない由良之助様。ア、コリヤ聲が高い。晝夜の酒に勞れてござる。必ずお目覺させますなと。地塗疊へ和らかに我身を添て沖の石。フシかはく間もなき酒浸の。羽織の裏の散し書。詞更て廓の粧ひ

見れば。宵の燈火打背き寝の。コレ見さんせ。美しく書て有に。可惜事は酒だらけ。定めし夕邊も。祇園町とやらにサレバ。例の彼一力に御座有べいと。何が彼の邊を行つ戻りつ。遊女共が噂を聞ば。由良様は今宵歌聞とやらに撞木町へお出と云。是は扱と取て返し。急迫行付大門口。喧嘩くんと立騒ぐ。相人を聞ば由良之助様。南無三寶と有無を論ぜず。五人三人打扱たれば。蜘蛛の子を放す様に。逃散跡に正體なく倒れてござるを漸と。何やら斯やらお供を仕たと。地咄す人より聞く怯弱さ。それはまあ。危険事。貴方に怪我は無つたかと。見遣一間を出る平吉。アレ調父様。奥の伯父様がの。仲居共く。水糝が喰たいと云てじやぞへ。ナニ水糝を作とお好みか。ホヲナイく無い用意が無い。地時の用には涕淚の。調坊主よ。父が禪貸は。裸に成れと地着物をフシ脱し掛れば地女房は笑止障子の破れを覗き。コレ調待んせ。今のは夢じや現々。ヤ扱は御本性ではなかつたか。ヤレく嬉しやの。既ての事に坊主めが拾。質八木の身代りに。遣ふと仕たと吹出し笑ふ門へも福は來て。鬼と名を得し外料治安。世界の人を腰下の。金物光らす目玉の出兵衛。引連て。フシ延張入り。地雪踏の儘に上り口蹴散す茶碗烟草盆。微塵こはいの内の體。來掛り覗く天川屋。フシ様子有んと立忍ぶ。地夫婦は疎々しよげるに付入。調ヤイ平右衛門とは儕じやな。取込居つた刀の持主。目玉の出兵衛と云男能見て置。元彼刀は鹽冶が切腹した刀。今度師直とやらと喧嘩故に上り物。拂ひに出たを買取。何でも鹽冶浪人に見せたらば。主人の刀とほしがるは定。スリヤ金儲に成事とフ治安。ヲ、そふじや。其跡は吾が云と。地胸ぐら取て引廻し。調コリヤ竊盜め。儕は由良之助へ出入する事知た故。どふぞ百兩位に賣て呉と。刀を直に預たぞよ。夫から毎日催促すれど。酢の菫蕪のと釣付居る。大方刀は賣て仕廻。金は由て窃收たな。ア、コレ必ず鹿相仰しやるな。左様な非道を構へて。今日の天理が濟ふか。成程ケ様に。延引成まするも。有様は。アノ刀を私めが求めたさ。ヤアく大きな事を吐出した。ガ悦氣たはさきやせぬかよ。サア定ならば今金せう。イヤ只今と申ては。無か。無くば刀せうかい。サアく地どふじやと勃誇かけ。迫詰られて。調如何にもく金子調

へ差上る。ガ連も、の事に爰四五日。エ、成らぬわい。儂が金を捲る間。待根が有ばな。弘法と張合て彌勒の出世待わい。わい。地慮憐念なと憎髪。取て引寄捻付る。奇悔なりと思へ共徐と堪夫の體。見るに悲しき女房分入。詞マアマア待て下さりませ。成程金は調ひまする。ハテ叶はぬ時は私が身を。地君傾城に賣れて成と。詞コレくおかた。鏡を見やいのく。轡に供へた連。今時の大蛇は吞込をむない頼付じや。エ、否な事吐すなど。地二人の牛頭馬頭寺岡を中に挟んでフシ責打擲。地留るに甲斐なき女業。何と詮方納戸より。兩手に脇差短刀。フシ引摺廻り出る平吉。夫はと寺岡立寄を。詞何所へく動き上るな。扱々子供は正直な。ドレ兒童よ。短刀伯父に地お吳と引奪ば。ヲ、調夫取おつても未爰に。父様の脇差が有。是て彼奴輩切ていのと地濃と泣出す我子を引寄。詞ヲく切て仕廻とは。侍の性根が有て愛い奴だ。出来し居つた。子心にも此親が。地恥頼かくを交隲と。見て居つては無念に有ふ。口惜からふ。可愛くく抱締たる。フシ恩愛の不覺の。涙堰合ず。詞コリヤ面白いわい。出兵衛が一番切れて遣は。ヲ、吾が縫て遣は。治安強みに直と往け。サア切れ切居れと。地尻引捲り鼻の先。摺付押付傍者無人。力味返つて平吉が。直向と拔は平右衛門。袖にて蔽ひ差伏向。フシ面目なげに見へにける。詞ム、へ、ハ、ハ、ハ、ハ、コリヤ胸衣ではない人じやぞよ。竹箆では行悪い。地馬鹿盡なと蹴飛して。引提出る刀に取付。詞コレく申し。此刀が手に入ませぬと死ても叶はず。又生ては猶々濟ぬ身分。どふぞ聞分。お賣成れて下されと。地妻も俱々取纏り涙と俱に掻口説。詞エ、どひつこい爰放しあがれ。イヤく何程でも放さぬく。エ、放せ。イヤく放さぬ。放しあがれとフシ迫合たり。ドレ詞其刀買ましよと。地言宛這入天川屋。義平と見るより赤面の。寺岡突退惡徒共。詞ハヘ味な買人が出たな。欲くば賣ふが恰好百兩。へ、わり様見事實はよ。イヤ手前が買はアノ竹光。何と賣て下さらぬかと。地變な望に平右衛門。アノ詞此魂かお望とはな。サレバイノ。世にない千將莫耶でも。品に寄たら求められま物でもない。が又譬千兩萬兩の金を積ても買れぬは。忠の地鐵に義の焼刀。適見事鍛上た。地竹光と云。名作の此

方の魂買たふござる。調サ不肖ながら。お賣なされて下されと投出す。地包の小判より光輝く。フシ男なり。地
 夢かと計悦ぶ夫婦。調是はく見る影もない拙者めに。大枚の金。お取替下さるお恵み。エ、忝し地くんと押戴
 きく。サア調お身達。金子渡さふ刀を持やれと。地言れて底氣味悪者共。鈍々立寄真向を。碎けて退と打たる包。
 あ痛し是は御均等。請取跡より。調か様去らばと地逃出すを。飛掛つて引掴み。兩方一度に投返し。頭轉胴骨打付
 られ。這々表へ逃出しが。點頭合て敷垣へ。鼻息もせずフシ忍び居る。地跡に三人囁語合。妻は納戸へ寺岡は。明る
 フシ障子の神々にも。フシ心を籠る短刀。フシ差置其身は押下り調先程よりの一部始終定めしお聞下されん。大切なる
 御刀。私風情が手に觸るは勿體なし。イザお請取下されふ。申しく地と云聲に。漸寢返る伸欠氣。調ア、詭々と何
 てゑすの。ハ其御刀は殿様の血汐を彩し給ひたる腹切刀。ア、コレくく。ハテやくたない不吉く。コレ此
 刀故にこそ。某様も我等も此難義。まだ仕足ひて祈るのか。ヤレく忌しや地穢れると。愛想投出し又轉り。たはい
 やくたいフシなかりける。地勿體なやと平右衛門。取上て拔放し。血汐に黒む鉢を。打守る目も血走る紅涙。思ひ
 出すも口惜み。去二月下旬。鎌倉の營中に於て。我君師直を双傷に及び給ふ。場所時節を辨ずと御憎しみ。既に御切
 腹と事極る。御家臣多き其中に。羨しきは太刀殿御暇乞相叶ひ。其儘白洲へ出らるれば。早御最期の其用意。庭上に
 壘を敷。三方に中巻仕たる九寸五分。御前に直しければ。亡君檢使に向ひ給ひ。我今日師直に切付たる刀を給よ。武
 士の腹切様を見せんと。コレ此刀を乞請給ひしは。後々に至つて鹽治こそ鈍刀を差たりと。云れん事の残念と。地
 思ひ給ひし故ならんと思へば彌殿様の御心根がお最愛ぼひ。調それより肩衣刎退給ひ。刀追取弓手のそは腹。岸波と
 突立引廻し。苦しき御息弗と纏。我斯成は覺悟の前。返すくも師直を討洩したる残念さは。億萬劫を經る迎も。忘
 れ難き我鬱憤。晴させ吳よと大星に。地傳へよかしと計にて終に果敢なく成給ふと。云跡聲も泣倒れ。身を揉五臟斗
 ずたに裂る思ひを想像る。義平も俱に無念の涙拳を。握り居たりける。地平右衛門は大星が。枕下に差寄て。調コレ

其時の御遺言。よもや忘れは成されまいに。毎夜／＼の御遊興。何たる事だと恨んでも見たり。イヤ／＼深い御所存ならん。大事の御身と思ふ故。抑山科へ御引越成されてより今日迄。餘所ながらの御供し。爰の門には立彼處の軒には轟然と。御歸りを見届ねば。休んだ事はござりませぬはいのふ地ヶ程に存ずる拙者が胸中。不便な事だと思召。少し成共御本心。お聞せなされて。下さりませい。詞又輕ひ奴故口走らふかとのお疑ひならば。生て居つて何にせん。サア。／＼。御手に掛つて落命ませう。コレ／＼申々。エ、去速はお心強い。餘り苛酷地胸欲なと。疊擲いて泣喚けど。只どう／＼の軒より外に詣はフシせざりける。地表に忍びし二人は笑壹。詞コレ／＼出兵衛。大星が性根は知た。鎌倉へ注進せよ。身共猶も試し見て。跡より追々早急げと。地追立遣て藪垣へフシ又も窺ひ立忍べば。寢入臥たる由良之助。勃然と起て藪垣へ。打込手裏劍治安が急所。フシ叫と許に死したりける。地是はと驚く兩人を。押鎮めて由良之助。詞ホ、ヲ彼等こそ我所存を探らんと。敵より入る廻し者。證據は則ち夫なる刀。亡君の御所持とは。晶敷似せ物。イデ其子細語らんと。地帯する差添。フシ上座に直し遙。下つて平伏し。詞是こそ亡君生害有し短刀ぞや。御切腹の後。御本家壹殿殿の手に入しを。竊に我に給ひしは。亡君御最期の魂を込られし劍なれば。是を以て師直が。首掻切て御石碑に。地手向よかしとの御心。ハ、ハ、ハ、ア有難き御差圖と。肌身放さぬ御賜。然すれば外に有らん様なし。詞去ながら偽にもせよ。是そ主君の魂と思ひて求めしは。適大功平右衛門。今こそ血判許したりと地連書の一巻渡さるれば。餘りの事の嬉しさに物をも得言ず寺岡は。踊上り飛上り。フシ三拜九拜する計。詞ヲ、嘸御本望出来された／＼。義平も大慶仕る。ヲ、お手柄／＼と。地扇立れば班々涙。詞アイヤ是と申すも貴方のお蔭。エ、忝い義でござりますと。地腕先引て確と血判。ノフ詞平右衛門殿。願ひ叶ふて嘸悦び。由良之介様。エ、地有難やの聲諸共。障子に潑と立血煙。周章ふためき天川屋。駈寄見れば無慘やな。咽吭ひしたる剃刀の双よりも薄き夫婦の縁今ぞ絶なん玉の緒も。我子の繼に引されて。引取兼ね息ヒイ／＼。聞狂しさは骨々に。對應ゆる平右衛

門。詞ヤイ女房。願ひ叶はゞ足手纏ひ。兼て覺悟を極よと。云付置たを能守り。ヲ、能死居つた出來したく。モフ何にも言な。取亂すな。早く逝矣。地と言口迄も突掛る。涙吞込吞込んで。詞ヲ、息引取ぬは悴が事か。氣遣ひすな。只今遣るぞと。地取て引寄振上る。刀を押ゆる天川屋。由良之助聲を掛ヤレ早まるな平右衛門。詞妻を殺し子を害し恩愛輪廻を斷切て。潔く亡君の仇を討んず汝が魂。ホ、ヲ感じたり遅しや。健氣の夫に連添は。俱に勇々敷忠義心。女の稀の志。惜まぬ例の武士さへ最期の際はケ程迄。健氣には有間敷に。ヤレ出來したり地去ながら。責て悴は助置。母が手向の香花を取せよかしと仁心の。詞に直に智識の引導。今ぞ落入フシ安堵の往生。安養世界へ我々も。導引よやと手を合せ。南無阿彌陀佛と同音に。唱ふる聲も擡曇り。袖にフシ吹雪の雨やさめ。地涙拂ふて義平は立寄。詞イヤナニ寺岡殿。由良之助様御親子始。徒黨に加はる旁は。御本望だに透られば。一人も此世に残らぬ御所存。貴殿迎も嘸あらん。然すれば血統を後の世に。残すも一つは先祖へ孝。幸々。力彌様の御舍弟は。廣嶋源五左衛門様に御座有ば。此子を直に御傳役。御奉公をさせませんが。先夫迄は此義平が。急度預り養育せん。地必ず氣遣ひ致されなとフシ約束違ひ亡跡に。義士の血統は今の世迄。残りし秋の夕日影映ふ空は紫の雲かと。見へし藤の森跡に。見捨る亡骸に。縋つて父と慕ふ子に。孝有貞ある武士の妻。忠有二人信有町人末世の鏡。天下一千五百石。國家の寶山科へ打連てこそ三重急ぎ行

第

七

フシ隠れ家を。嘸や風雅と世の人の。夕日を隠す山科に世を憂と住む由良之助。他行の留守居徒然に子息力彌が小音に。讀書の聲も松風の。フシ音に紛れて物淋し。地爰に所縁の形振も。四十の上は二つ三つ。賤しからざる女房の。昔を殘す棧外れ。それぞと尋ねフシ切戸の外。詞何方ぞお頼申ませうと。地音信ふ聲に見臺押退。詞御用ござらば御

遠慮なくお通り成されと慇懃な。地詞を鹽に鈍々と。内へ入る顔見るよりも。其儘立て入んとする裾を控へて。調成
 程く。そふ有ふとは存じながら。來悪い所へ漸と。地參りし様子は此文箱。我身の願ひを我身が使。調憚りながら
 由良之助様へ御取次下さらば。地生々世々の御厚恩と云つゝ文箱差出せば。不審ながら手に取上。調何様子細有べき
 事。併只今宅に有合さず。見苦しなから一間にて。旅の勞を御休息。地夫はまあ／＼お嬉しや。お辭宜申さず暫しの
 内。お座敷を借請ませふ。調諺にも旅は道連情の舍りは力彌様の意志。此上ながら何かは宜しう。地萬事は後刻と互
 の挨拶。下女が案内に打連て鈍る。フシ色なく奥へ行。地跡へ物申頼ませうと。表口から奴が高聲。調原郷右衛門竹森
 喜多八大駕文吾推參と。地案内と俱に入來る。袋に包めど心の錐。面へ顯はす三人が。挨拶もなく打通れば。心得ず
 とは思ながら。先々是へと客座に進め。調稀のお出に折題敷。親共義は他行致せば。不調法成る拙者が手前。地鹿茶
 成共と云を打消。調イヤサ茶も水も所望にござらぬ。三人申合せ參つたは。捨置難き由良殿の胸中。鎌倉出立延引
 と云。世の難説に違ひなき放埒至極の不行跡。但し是にも子細ござるか。郷右衛門承はらふ。イヤ／＼夫計でござ
 らぬ。此間より多くの妾を召抱へ。酒色に耽り剩。諸士の血判を返されし心底。此喜多入其意を得ぬ。如何にもく
 大星殿の返答次第。思案一決致せし大駕。地いつかな此座は動かぬと忠義。フシ途の國侍。地力彌は猶も押鎖め。調
 御立腹は至極なれ共。量難き親共が胸中。定めて子細有べき事。ガ只今も申如く他行なれとも歸宅も追付。暫時御待
 下されかしと。地和らに三人澁々ながら。然らば暫く待合さんと。フシ座次作れば勝手から。下女が心得煙草盆。お
 茶の給仕の馳走役。姫役を獨してたゞ手斜に傾し。夕陽照す薄紅葉。顔に散せし酒機嫌。野道傳ひに由良之助。草
 にも心置手拭の。輕い姿や寒竹の。釣竿肩に振撥げ。歸る道草二人の女蘭と。菊とは脱捨の。羽織と刀坊主持。調サ
 ア／＼お菊様今彼處で見付た茶筌賣。是からが前番。ヲ、蘭様と仕た事が。アノ茶筌賣と云者は妾こそ坊様な
 れ。頭巾の下は常の男ナア申し。ヲ、京馴ぬお蘭。茶筌賣を誠の坊主と心得たも無理でない。此公事我等が捌かふ。

互恨のない様に今夜からお蘭もお菊も。兩方を一所に占る。二挺鍔と遣掛けふと。地堅い放氣を庵の戸口。それと聞より力彌は立出。關郷右衛門殿喜多入殿。大駕殿お三人先刻よりもお待兼。ホイ何三人が来られしとな。夫は珍客御意得ずば成まいと。地羽織打被腰刀。フシ差間遅しと内に入。調是は孰れも能こそお出。鬱散の爲今日は妾共を召連近在の池狩に参つたが。不得手な獵て小鮎一つ掛らぬ仕合。四十過ては針先に弱りが来て。釣物は叶はぬ。ヤ各も嚙御退屈。ソレお盃の用意をせい。地アイ。間の唐紙を明て勝手へ行跡を。見送つて膝摺寄。調イヤナニ由良之助殿事煩雜申に及ばず。鎌倉發足延引と云。諸士の血判返されしは。御所存はし有ての義かな。ア、郷右衛門殿お氣が長ひ。雜班。と聞に及ばぬ。鑑師直が威勢に恐れ。今と成ての心變りは。腰が脱たに相違ござらぬ。ヲ、大駕殿の仰の通り。不忠者の斧九太夫途中に於て出會さば。一討と存じ居つたが九太夫よりは大星殿。御返答に依て喜多入が刀の切味お目に掛る。但しは子細有ての義か。サ、御返答。地と鐙打鳴し三人が。中に取巻迫掛れば。父の心底如何ぞと危踏力彌。騒がぬ大星。調ム、血判返進仕り。敵討違變致さば拙者を切とか。言にや及ぶ討て捨直様出立。師直が屋敷へ踏込本意を遂る。ア、イヤ夫は覺束ない。我々共が心底を犬を入れて嗅廻る師直。鹽治崩れの浪人共が。由良之助を討た杯と聞たらば。彌彼方に油斷せず晝夜の警固加勢の大勢。用心に用心を重た屋敷へ切入ては。本望遂ぬ計でない虚死仕て狼狽武士と。後々迄の物笑。亡君迄のお名を穢す不忠不義では有まいか。寝られぬ儘に此方も能分別を仕て見れば。敵は本身我々は扶持放されの素浪人。及ばぬ望は太石を抱て。水練の稽古するより危険。イヤサ左様では一味の武士へ。ハテサテ約束變改常の例。フン反打るゝは了簡ならぬか。不忠者に成度ば我等手向ひ仕らぬじや如何様共御存分と。地刀からりと投出した。一句の理詰に手指も成らず。兎やせん刀の鯉口も。少しは緩む三人が。猶豫の體に詞を正し。調進む者は退き安し。ナ御合點か御合點が参らずば。自が胸中はコレ此釣竿。渭濱に直なる針を以て釣せしとは。太公望が直きを賞せし後世の譬説。千辛萬苦の功を積ねば。大望を成難い。

地盤雪に由て書を學ぶも。君子進學のためしなれば。詞急ては事を仕損ずる。ナ。ナ。此道理を能辨へ。御思案有何れもと。親子諸共座を立て。詞に籠る節籠る竹は直なる義士と義士。暫は心隔の襖。フシ引立奥に入相時鐘を知らせか駈来る下部。椽先に手を突へ。詞小寺様貝原様。其外の御旁。大星様の御返答先程よりお待ち兼と。地聞より實にもと郷右衛門。詞ヲ、嘸あらん。何と御兩人如何思召。思慮深き大星殿聞所ある今の二言。一先歸り評議致さん。成程成程御年輩成貴殿の仰兎も角も仕らん。大驚殿如何思召拙者逆も其心。然らば同道。先お先へ。地比も薄暮人顔の。見へぬも宜と打連立道を早めて出で行。フシ秋の日早く。暮過て千草に。集虫のフシ音に。最心も澄渡り。地人なき隙を幸と。手燭片手に由良之助。荻吹風の音に迄。心奥口見廻し。疊引上げ相圖の咳嗽。それと心得切拔し。根太板押開下屋より。垢付衣服大小の。柄糸錦たる斧九太夫。フシ惡媚もせず座に着ば。地小聲に成て由良之介。詞一別以來御意得ぬ其元。思ひ掛なく今朝未明。此茅屋へ來られしが。古朋輩共貴殿を猜み。見付次第討て捨んと鵝の目鷹の目。若過ちも有んかと。今日の下屋住居。御老人の嘸御不自由。ガ夜に入れば氣遣ひなし。サ、打寛ひてお咄し有れと。地他事なき詞に斧九太夫。詞ナニサ。千里の虎も時得ざれば。野狐輩に恥かしめらる。同じ浪人とは云ながら貴殿は知行の餘情厚く。元來拙者無欲なれば。貯蓄とてもなく。據ろなく寄食に參つたは。世話に申す繼母の従弟とやら。扱々面目もない仕合と。地卑下の詞も何所やらにフシ毒を含みし嬖侍。地温和の大星耳にも掛ず。ア詞お年故か九太夫殿愚痴な。浮沈は九度とは申さぬか。何事も盛衰。お心置なく何日迄成共。夫は大慶。古朋輩と思召はこそ。御懇志の程忝ない。些尋ねたい事がござる。何と申て見ませうか。ハテ入ざる御遠慮何成共承らふ。外でもござらぬ。御用意は整ひましたか。フウ。用意とは。ハテ隠し召れな。色と酒とに身を持崩し。放埒情弱と心を緩させ。亡君の敵師直を討。其用意は能ござるか。地底意を探る詞の端。夫とは知れど何氣なく。詞通黒星お目高と申し度いが相違。尤本國離散の後。敵を討討略と存付た遊所通ひも。二三度目から面白なり。四度目

からは彼色めが。眞實可愛成て來て。今では寧何も彼も。素鈍と忘れて居續け遊び。イヤモ武士付合の理屈臭とは天地の違。内へ戻ると美しい。妾共が勘強掛る其鹽梅。イヤモどふも地く〜と忠の道。捨しは可惜武士の。纏フシ紐にも掛らぬ風情。詞ハ、。命は塵芥より輕し杯と。當座は血氣に逸れども。何として〜一致せまい。左すれば彌主人の仇。ハテ扱討ぬ證據は一味の義士へ。血判戻した様子は下家で承知でござらふ。フン厚恩有主君の敵。討ぬは臆病腰脱武士と。地扇を持て打掛る。其手を確と。詞コリヤ九太夫殿何仕召る。イヤサ不忠不義の其魂。矯直さん爲。イヤ御邊如き愚人の折檻。請る様な大星ならず。ヤア愚人とは舌長し。亡君御在國の砌。拜領せし此扇。長命せよ逆壽の文字を。書し給ひし主君の筆跡。サ是則御手を下し御折檻と。思ひ掛なき主命の。異見の杖に。ハ、ハ、ハ、はつと計平伏の。襟髪取て丁寧々。打据〜居丈高。詞本國没落の砌。某一人。臆病未練と見せたるは。敵に心を赦させ。忍び入て一討と表に飭る不忠不義。夫に引換其方は忠臣義臣を面に顯し。酒食に耽る大腰脱。斯云が無念ならば。武士らしく切腹せられよ。但し亡君の仇師直を。一太刀恨むる性根はないか。サア〜地返答せられよ大星と。扇を撥と投付て心詞もフシ荒折檻。地由良之助諸もなく。扇取上げ筆跡を。見るに付ても御最期の。御憤りを今更に。主人に扇の心地して。骨も碎くる無念のフシ涙止。兼て見へけるが。地漸涙拭ひ。ハア、詞驚き入たる九太夫殿。連れ希代の忠臣義士。人至て疑へば人俱に亡ぶと云。此上何か疑念を懷かん。今こそ明す我本心。地御目に掛んと懷中より。取出す一巻押開け。差寄て寫くと見。ムウ詞貴殿を始四十餘人。義を一決に徒黨の連判。如何にも。去春本城評議の節。家中一統に取置たる。未練卑怯の鼠輩を除き。誠生死を誓ひたる腹心四十七人の。サ此棟梁は九太夫殿。身不肖ながら由良之助。兩人義士へ駈引は。地貴殿子房の智を振ひ。我又孫吳が術を借。爭か師直手の下に。詞ノフ九太夫殿。ヲ、サ〜大星殿。尤左こそ有べきと。地本心顯はれ忠節の。心も揃ふ兩家老。フシ悦び類ひぞなかりける。地九太夫重て。詞某が思案の的。百發百中違はざりし。地イデ血判と腰刀。拔手を暫しと押止め。詞本より

貴殿は一國の重家老。失禮ながら由良之助。故殿様より拜領致せし。御紋附の上下時服。召替られて血判せられよ。實に尤見苦しき此體は。摩利支天弓矢神への恐れも有は。辭退は却て無禮の至りと。地詞の中に一間より。力彌は故實の廣蓋に覆ひ。掛たる用意の時服。フシ傍近く差置て。詞イサ御召有れよと。地云も潜々親子の外。人はそれぞと白紙の障子細目に窺ふ女。目早く大星打消燈火跡は。座敷もフシ眞闇許。詞由良之助殿。何故灯火を消召れたな。サレバ最前も申す如く貴方を拒む味方の義士共。未だ血判濟さる中。理不盡の働き成さば大義の妨。其處に迄御心配の程。地云しと一禮し。探りながらに件の衣服。手に取上て押戴き。詞亡君の御紋付。着致す今宵は。某が身の最上吉日。イヤモ心の嬉しさ御親子共。御推量下されいと。地古着脱捨手早くも。時服と心得着るは無紋の白小袖。詞是は。力彌殿。御手傳かお構ひ下されな。地云。つ。袴の紐引締。兩腰追の九太夫も。闇は無益己が身の。死装束とは白砂を。差足拔足切戸の外。内を窺ふ原竹森。小寺大驚岡貝原。息を詰てぞ。フシ控へ居る。地九太夫威義を改めて。詞時服上下着致せば以前の如く。成程伯州鹽冶の執權職。急いで血判あられよ。ヤア誰か有明を持。地云と答て蘭と菊。手先に霜の奥よりも。運ぶ燭臺蠟燭の。明りに悔りコリヤ何じや。ア忌はしき淺黄上下無紋の小袖。偽り着せたる所存は如何に。ホ、敵師直が犬と成。穢し祿を喰んより。亡君其許に下し置れし扇にて。切腹の學びをなし。悴が介錯受召れと。地思ひ寄さる一言に。驚ながら色も變ぜず。ヤ某師直が犬成とは何を以て。驚忽ならんと詰掛れば。イヤサ天眼通は得ず迎も。貴殿如きの計略争が見抜て有べきか。其偽りを誠とせし我心は。不忠不義成侍に高祿を與へ置し其主人こそ馬鹿者よと。勿體なくも亡君の。御名を穢す口惜さ。斯は計ひ申せしぞや。何卒悪心懸へし。深く切腹有らば。恥を知たる侍と。世の人口を防ぐと云ひ後々末代まで不忠者腰脱武士の惡名を。殘さん事の心外さと。道理を盡し様々と。餘義なき詞も空吹風。地物をも言はずのつさ。庭へ下り立出行を。力彌鐙を無手と取。詞返答もなくコリヤ何れへござるな。ハテ何處へと云だら歸り申す。勅使大禮の師範に双向ひ。處

死仕たる鹽治判官。主人と云も穢はし。師直公の臣と成今出頭。此九大夫。妨けなざば討放さん。其處立去れとフシ振放せば。詞何處へ。切腹承引致されずは。敵の忍びの犬侍、争か其儘返さじと。地云より早く腰刀。拔放して切付るを。飛逸巡て抜合せ請つ拂ひつ上段下段。劔を削る鑢音双音。元來血氣の大星力彌。苛つて切込九大夫が刀からりと打落せば。コハ叶はじと飛鳥のフシ如くに駆出る。地切戸を立切一味の義士。ヤア詞人非人の斧九大夫。逸出なば一討と。地呼はる聲を前後の敵。南無三寶と用意の手裏劔。大星目掛射る矢の如く打掛れば身を交し。左右に拂へば手裏劔の目當は遙達ひ棚柱襖にはつし。最是迄と差添引拔。踊り上つて切掛るを。手練の大星極落。双物持て手を腕がらみ。ぐつと引付引据て。切先物打鑢元。篤くと改め扱こそ。詞開城の節紛失せし此劔は。足利殿より鹽治家へ。御預ある長圓の銘作。御代替りの繼目の規模。一旦お家斷絶すれ共。正しく御舍弟在せば。家再興の期も有んと。盜隱すは師直に。飽迄阿る人畜生。邪非道の天の罰。地思ひ知たか九大夫と。刀たくつて椽先より立蹴に働と蹴落せば。表に控へし一味の義士フシ班々々と駆入て。詞大星殿の賢慮の如く。劔の盜賊非道の九大夫。地賜殺しと立掛ればヤレ待れよ旁。詞逆森に掛る共。飽足ざる國賊ながら。自滅さするは武士の情。サア尋常に切腹有か。但し押へて搔首せうか。サア。地と鑢元寛げ追取卷。じりりと付廻し通れ難き後の方。思ひ掛なく一聞より主は誰共白刃の錯先。障子越に九大夫が。脊フシ骨を掛て突込だり。詞ヤア比喩の働何奴なるぞ。ヲ、儕に出て儕を亡す。非を改めて斧九大夫。只今追腹致せしと。地聞より喜多入駆寄て障子開けば以前の女。弓手の腹に短刀突立朱に染たる必死の有様。詞ホ、ヲ九大夫妻女お禮殿。最前力彌に渡されし願の趣。女ながらも夫の介錯。健氣の追腹出来されたり。ヤア。最早四更の刻限ならん。爰構はずと發足の用意。地と大星が。差圖に隨ひ徒黨の義士フシ残らず奥へ駆入たり。地由良之助一間に向ひ。詞先非を悔て斧九大夫。只今切腹仕る。息有内に亡君へ。御目見へ願ひ奉ると。地詞と共に彼所の襖押開く。床の間の正面に恭く。靈光院殿の御位牌香花を供へ。左右は大

星親子を始^{はじめ}四十餘人が姓名を書記したる金の短冊。かほよ御前^{ごぜん}を傳^{つた}きの。二人の女諸共^{むすも}に合掌^{がしやう}。したるフシ其有様^{よう}。地御聲^{おんこゑ}涼しくかほよ御前^{ごぜん}。詞松柏^{しそくはく}は雪の中にも。操正^{みづただよ}しき由良之助の忠誠^{ちゅうせい}。夫に引換^{ひきかへ}。敵に詔^{みことづ}ふてなし。天罰^{てんばつ}思ひ知つたるかと怒りに。交^{まじ}る御涙^{おみなみだ}。地九太夫無念の齒^は嚙^かをなし。エ、詞御臺^{おんたい}此家に在^あと知^しば。幸^{さい}の能人質^{よきひとしち}。地奪^{うばひ}取^とて師直^{しちき}に。渡さんず物殘念^{ものざんねん}やと。地邪智^{じやち}の詞^{ことば}に女房お禮^{いとう}。最苦^{さいくる}しき聲音^{こゑね}にて。詞ア、勿體^{もったい}なや冥加^{みやが}なや。忝^{かたじけなく}くも殿様より。二千石を頂戴^{ちやうだい}せし。地御恩^{ごおん}を仇成邪非道^{あだこじまひどう}。憎^{にく}しみもなふ由良之助様。理^{こと}を盡^{つく}しての御教訓^{ごけくしん}。餘所^{よそ}に聞^きなす臆病未^{おくびょうみ}練^{れん}。暗々^{あんくく}人手に掛^かせては。詞苗字^{めうじ}の恥辱^{ちじく}と是非^しなくも。思ひ切^{つぎと}て突留^{つきたど}た。罪は目前^{まへ}コレ斯^{かう}と。突込^{つきこ}劍に諸手^{もろて}を掛^かきり、と引廻^{ひきまわ}し。詞ノフ由良之助様。主人に背^{そむ}く九太夫が。不忠^{ふちゅう}をお赦^{ゆる}し有様に。地殿様の御位牌^{おんいはい}へ。お願ひなされて下さりませと。云聲^{うんこゑ}も早絶^{はやたぎ}々に。息も苦^{くる}しき四苦八苦^{しきふはく}。疵口^{きずぐち}よりも。逆^{さか}る。血汐^{ちしほ}に混^まる雨淚^{あめなみだ}。フシ膝^{ひざ}に。漚^たへし風情^{ふうぜい}なり。地節義^{せうぎ}を感じ人々と俱^{とも}に哀^{かな}む由良之助。詞ホ、ヲ通^{とほ}れ忠貞^{ちゅうてい}全^{けん}き妻女^{さいにょ}。それに劣^{おと}らぬ兩人の女は伊藤長七^{いとうちやうしち}が。忘籠^{わうろう}の二人の娘^{むすめ}。御臺所^{ごたいしよ}の御先途^{ごせんどう}を。見届^{けんぎ}申^{まを}す健氣^{けんき}の者共^{ものども}。假^{かり}に妾^{めかけ}と流布^{りゅうふ}せしも世上^{じやうじやう}を憚^{おそ}る爲計^{ためけい}。死^ししての貞心^{ていしん}生^なての忠節^{ちゅうせつ}。又^{また}と比^ひの有^あべきか。九太夫殿に十ヶ一^{じゅうがいつ}。斯様義心^{しやうぎしん}の有^あならば。由良之助何^{なん}をか愁^{うれ}へ。抑^{おさ}も開城^{かいじやう}の始^{はじ}り。地寢食^{しんじき}を忘れ人機^{にんぎ}を計^{はか}。心^{こゝろ}に有^あぬ放埒^{はうらち}情弱^{じやうじやく}。人の嘲^{あざわ}り惡言^{ごんげん}を。答應^{こたへ}ゆる辛抱^{しんぱう}は。亡君^{むしきみ}泉下^{いみづか}の御無念^{ごねん}を散^ちぜんものをと我^{われ}一心^{いしん}。念力^{ねんりき}天に通^{とほ}じてや。詞長圓^{ちやうゑん}の劍手^{けんて}に入^い上^{あが}は。各^{おの}出^で立^{たち}致^{いた}されよと。地聲^{しやう}に隨^{したが}ひ立^{たち}出る。皆^{みな}々人目^{ひとめ}を忍^{しの}び出立^{しゅつたち}。似^にせ廻國^{くわいこく}は郷右衛門^{きやうゑもん}。笈^{おひ}に懸^かせし大小^{だいせう}の。唇配^{しんぱい}りの禰宜^{ねい}姿^{すがた}。烏帽子^{くさ}子喜多八^{きだはち}門出^{かどで}を。フシ祝^{いわ}ふ山伏^{さんぷく}。貝原義助^{かいげんぎすけ}。小寺久内^{こくね}岡八十七^{おかはちじゅうしち}。或^{ある}は虛無僧^{こもそく}傀儡^{くわいばい}師^し。是大星^{おほほし}が計略^{けいりやく}にて。智仁^{ちじん}勇備^{ゆうび}の三度飛脚^{さんどていきゃく}は大鷲^{だいじゆ}文吾^{ぶんご}。御臺所^{ごたいしよ}に式禮^{しきらい}し庭前^{ていぜん}狹^{せま}しとフシ居並^{いなら}だり。地大星^{おほほし}勇^{ゆう}んで如何^{いか}に旁^{はた}。詞殘^{ざん}りの人數^{にんとすう}も思ひ。姿^{すがた}を變^{かへ}て彼地^{かち}へ入^い込^こ。到着^{たつちやく}次第^{しだい}示^し合^あさん。敵地の繪圖^{えいず}は先達^{せんたつ}て某^かが手^てに入^いたれ共^{ども}。小勢^{せうせい}を以^{もつ}て向^{むか}はんには。只夜討^{よるう}より外^{ほか}はなし。アレ彼の如^{ごと}く床^{とこ}の間に。四十餘人が姓名^{せいせい}を書記^{かきし}たる短冊^{たんぱく}は。其夜^{そのよ}の手配^{てくばい}兼^{かつ}ての工夫^{くふう}。大手^{おほて}搦手^{なかつて}双方^{ふふう}に分^わり。地繼^{つぎ}梯子^{はし}にて塀^{へい}を越^こえ。切口^{きりぐち}所^{しよ}は玄關^{げんくわん}口^{ぐち}。

鴨居に箆る竹の弓。工夫は最前釣竿の糸は則控への絃。地切て放さば一時に兩戶外れて宅中へ。無二無三に亂入し。
間毎くの壁襖に。紡車に等しき差込手燭。詞敵を明りへ牽制出し。地味方は暗きを小櫛に取。夜討の大事は奇勢
の變。譬ば師直鐵桶の中に忍び共。義心鋭き鉦に何條討て置べきかと。居ながら計る大星が。英智のフシ程ぞ類な
き。地皆々大きに感心し。詞此妙計にて戰はゞ。地敵師直が鐵首は。最早手中に入たる同然。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
フシ悦しやと勇み聲。詞音高し人や聞。謀は密なるを。良金親子は長圓の。劔を是より御舍弟へ。お渡し申跡より
出立。道中堅固で彼地の再會。地早フシお暇と一味の義士。かほよ御前へ永別の。禮義も厚き。フシ別れの涙。出行
諸士を見送る親子。羨ましげに延上り見遣るお禮が臨終の際。無念くを九太夫が。末期の一句二世の縁。引取息も
一時に。死出の旅立現世の旅路空に。輝く大星が。頓て雪ぐは會稽の。山と川との相詞。末の代迄も隠れなき。武名
の。程こそ三重へ勇々しけれ

第八

吾妻方道は往來も近江路や。石部に隣る横田川。此程の雨續き水嵩増る渡し場に。上り下りの歩人が。我後れじと咄いや咄や駄荷の次馬指持とんぼ關東平。息もすた／＼櫓の齒を引もフシちぎらぬ通ひ船。向ふへフシ着間又跡へ。待人乗人走る人。とつば川岸乗掛の似た山繪符も六突に。實に賑はしき往還筋。往來に紛れ義士の面々。略す姿も跡や先行過後れ立招き。尾葉も枯野の薄原。フシ岸に待間に又着船。詞ア、コレ／＼マア上る衆上てから乗たが宜わい。怪我せまい／＼水が高いぞ。サア／＼跡へ乗んせ／＼。もつと上手へ乗んせ／＼。サア／＼宜かな。宜かな早ふ乗たり。遅けりや置て行ぞ。コレ親方。一寸と表張て下んせ。おつと宜じやとフシ漕出し。詞擬と旦那衆。高水じやに少々宛酒代氣を張て頼みやんしよ。ヲイ／＼。地合點と端數錢。五文拾文手に渡せば。詞サア表の衆錢はどふじや

な。ハイ、私等かへ。イヤ申し見さんす通りの願人坊。吾等も修行者旦那廻り。お初穂手の内て通る者共。久しい奴じやが。彼薩摩の守でどふぞ遣て下んせぬかい。エ、希代な乗合じや。今日程よしれぬけぶな者の通る日はない程にの。コレ此方酒手貰ふた旦那衆の手前もどふやら氣の毒な。船の着迄に銘々の商賣口上。船賃代に何と一口づつ遣せんかと。地云れて互に顔見合せ。同ヲ、何か扱。錢の代と有事ならム、神職。ヲ、サ先貴僧から遣しませい。イザ其元。イヤ其方と。地譲り合たるヲ迷惑顔。同サア誰彼と云ふより。初端に居るお山伏。何成共所望。ヲ、身共は當山修驗道。當卦八卦手の筋墨色ア、コレ其様な事は吾や嫌ひじや。幸持たソレ錫杖で。ちよんがれは奈何有ふ。コレハ氣の毒。愚僧は中々其様な頓作事は不得手。ハテ何成共むちやくちやに些少計遣んせ。エ、傳法のかは遣て退きよとしやつく錫杖振立。さんま情は坂田の女郎よ。さんまさらく。三州坂田の盛の女郎衆は櫻木狹衣政木に小太夫。宿屋往來は女郎衆のお聲。捻つて廻つて笑つて歩行んで。癖は何にも浪花のどらくら。京の浮浪と大坂のぶらぶらとお江戸のぶらぶらと。三千三百三ケのぶらぶらに弟子らやのららに。談合てれつくおらんだ孫子が。とんてきほらのうてゝんてんに。野暮助しばらがお作り杯とは。文や艶書てびやくらいじやらくら。是りや又餘り深漫奴だにホ、ヲあらい。親玉。其次は禰宜殿とぶじや。ハアテ等は常陸の大宮。鹿島香取の大明神。昨年は米穀が。圖なふ實入悪く御座り申た所て。今年は壹升八合の大豊年といふ御託宣て御座り申す先大豆小豆黍稗の類。畑物は壹升二三合。早稻が十分中稻が十二分。晚稻が十五分から十八分迄の大上作。斯申すも人々が御千度打たり。施し召れた御神徳で御じやり申す。無上靈寶とふかみゑため。サア其次願の舞ソレお猿殿役廻り。地おつと幣帛取々に。目出たの秋津洲や。天下太平思ふ事叶ふた。末は鶴龜五葉の松。去とは五葉の松榮へて。目出たけれ。同次は達語傀儡師。お定りの指人形。囃方はコレ坊様。ヤ是は迷惑千萬と。地云つゝ願人風呂敷より。取出す太鼓手品能く。揃ふ唐子の調拍子も。ヤアンぎやうし。白鵲文鳥金

鷓鴣鳥かっこ。鶯鷺山雀慈悲心丹頂翡翠鳩鷓鴣鳥。吾呼南京鳥。——鷓鴣鷓鴣鵲鵲が連雀比翼三光鳥。雉子へ——鳥。
 シメコメ——。日鵲小鵲。小鵲日鵲日鵲小鵲こ深山に山鳥けんほろりとちゆ。よいや——と人々が。咄と譽たる関の
 聲時の間にフシ着向ふの岸。地ヤレ嬉しやと銘々が飛下——急ぎ行。人目堤に大鷲竹森爲浸冷汗辨慶が。安宅を越し
 勸進帳。虎の尾を踏渡し錢。通れ活たる心地して。東路フシ指て急ぎ行。地跡にばんやり渡守。エ、。詞折惡ふ登
 りはなし空船でなと戻らふと。地船は半へ漕戻る。此方の堤に急焦道に後れて寺岡が。省すに及ばぬ持前のフシ足輕
 輕と旅出立。コリヤコリヤ船頭。吾は大分急ぐ者だから。早ふ船を造つてお呉りやれ。エ、此人わいの。此高水に只
 た一人誰が船道る物でいの。然して吾や空腹ふ成た。些少の間見て居て下んせ。其間に乘人も来るはいなふ。爰から
 見へるアノ家じや立ながら茶漬四五杯。撥込で来るはいの。ハテ扱それは聞分ない。コリヤ——。小ばん。頼むべい
 くと。地云ど空吹川風を尻にフシ聞して歸りける。地跡にとほんと平右衛門。詞エ、時も時乗合でも有たらば。
 ツイ渡して吳居らふに。如何したら宜るべい。ヤ幸々櫓は船に残して有。自分に漕で渡らふと。點頭——飛乗て
 船漕出す向ふの方。稚兒抱き薄雲が。とつフシ川岸に走り着。詞申し——早ふ其船を着て下さんせいなア。地どふ
 ぞ後生じや頼ますと泣々呼はる聲に寺岡。詞何だ頼むとは何を頼む。イ、エイナ。私は女子の一人旅。跡の宿から殿
 達の三人連。私一人と侮つて。色々の悪い事。漸茶店て偽り云裏から脱て來ましたが。追付跡から來るで有ふ
 地どふぞ情に一渡し追脱して下さんせと。頼めば此方は。ハテ。詞氣の毒。吾連も連に失迷大急用の者なれ共。左様
 した難遊見捨るも道ならず。地渡して吳ふと船喝たり。ナニ女中焦事はない靜に乗つしやい。ハア忝ふござります
 る。連も情に少とでも早ふ向ふへ。ヲ、此方よりは吾が急用。去ながら個様渡して進ぜるだから。譬令其奴等が來
 たと儘さ。此方に追付しやせない。跡は吾が吞込だと。地棹さす船の右左。袖フシ振合も頼毎しき。地詞に此方は會
 釋して。詞それはマア——お嬉しや何を隠さふ。私は津の國毘陽野と云所に。逢ねばならぬ人有故。稚兒連て鎌倉よ

り。遙々尋ね参る者。御縁が有は又重ねて。お禮も申す爲なれば。地貴方のお名を。詞イヤ／＼禮請ふ迎世話はせない。ヤ何かと云内最ふ岸だ。コレ女中ぐはつたりだぞ。心得てソレ怪我せない様に上らつしやい／＼。ハイ／＼そんなら。此儘此御恩。地死んでも忘れは致しませぬと。伏拜み／＼。フシ石部の方へ走行。ハテ世には憎い奴等も有もんだ。一人旅の女を捕へ種々の悪者共ア、大方コリヤ勾引して。石部土山の留女にでも。賣べいと思ふ物仕共と。地又漕辰す川半。向ふの堤に胡亂／＼眼。がす侍が二三人。ヤイ 詞船持来らふ。小ばん／＼と。フシ横柄聲。地寺岡は船の内落たる手紙片手に熟々。ム、ウスリヤ。今の女が勘平殿の所縁の者で有たよな。知ぬ事とて残念／＼。そふと知たら鎌倉の様子。何か委しう聞べいに。去ながら彼方も氣躁。此方も急用。假令無縁の者でさへ。救ふて遣氣で渡して呉たに。所縁と知たりや猶更と。地急ぐ我身も打忘れ。態と片々フシ漕行船。詞ヤア早急と船持きる。去連は優長な鈍夫では有わいの。ナニ馬鹿類な。吾は船頭じやおりないから。ソリヤ渡し守に云つじやい。如何様そふだ。コリヤ一番尤。然らば其方物問ふ。此船場へ二十一二な女が。稚子懷抱て來はせんんだか。ハイイ、エ。吾は女の番はせず如何が知ない。ハレ奇怪な。此道より外はない。エ、エ聞へた。拟は汝其女に渡して呉いと頼まれたな。ハ、ハ、ハ、渡守でもない物が。何て人を渡し申そふ。ムウ是も又尤だはい。夫なら頼む程に。其船早ふ此方へ付て呉いサ。イヤサ今云通り素人なら。どふで船は間取申す。去ながら頼むと有ば。船は着て遣べいと。地ぐはつたり岸へ。フシ驅上れば。詞ヲ、太義。ソレ 地と掛聲兩方から。利腕取て引立れば。詞コリヤ何とする。ヤア何とは横道者。儕女を何所へ遣つた。眞直に吐せば宜。左様ないと汝生てや置ぬと。地中に取巻フシ動かせず。詞マア／＼待つしやい。／＼。眞實吾は知ぬ事さ。ヲ、知ぬ物が何として。船を遅く着居つた。隙取せは逃したに違ひはない。取逃した其代。己を存分呵責と。地無法の手籠に平右衛門。日比の荒氣に手は鈍々。去ながら大事の前縁の事に身を捨ては。是迄仕込だ忠も義も。女房迄が虚死と堪へ／＼膝折屈。詞申々吾が悪くば幾重にも。何卒御免下さる

べいと。地屹れば猶も付上り。詞今屹言する手間で何故船を着なんだ。船が後れた計で。女めは何國へやら。誰かさ
れた腹直に。サア／＼其處が皆様御了簡。此上は何如様共手向致さぬ御存分。まだ其上に誤りの一札成共。コレ
申し。ヲ、それが定なら今一遍。此船向ふへ漕でうせふ。エ、イ。否なら儕堪忍せぬが。サアそれは。サア。サア。
サア／＼如何じや。エ、何とせふ是非がない。渡すべいと。地云ふに皆々サア早くと。無理にフシ引立乗移る。
地不省／＼に平右衛門。櫓取直し。詞ヤナニ皆の衆。高水に素人業。自由には漕悪い。船先へぐつと出さつしやい。
ヲ、そりや如何成と其方が勝手と。地誠と思ひ表の方。サア船出し申す危険と。地岸に突張櫓の先船は川中其身は岡
へ。櫓と上り櫓先で船をフシ深みへ突出せば。エ、憎い下郎めコリヤ何とする待居れやい。上て吳。上居らぬかやい
と。地云ふ間も早き高水に船は。輪回川下へ廻りフシ流れて出行を。地見遣る此方は吹出し。詞ハ、ハ、ハ、磯野郎
め。今に泥水喰つて早く往生窺坊め。ハ、ハ、ハ、ドリヤ。地罷らふと平右衛門。跡を見捨て足逸に鎌倉指して三重急
ぎ行

地廻^{まはり}庇^ひに茅^{かや}の屋根^{やぐら}。葺^ふ傳^{でん}へたる家の風。南^{みなみ}を請^こて暖^{あたたか}な福裕^{ふくよ}の生活^{くわくわ}一郡^{いっぐん}に。二もなき糸圖^{けつづ}三左衛門重義^{しんぎ}と云郷士^{ぐうし}ありけるが。何^{なん}圖^ずからず満^{みつ}る月^{つき}。フシ麁^{あら}る例^{れい}か子息^{しよし}勘平^{かんへい}。萬事^{まんじ}限^{かぎ}りの床^{とこ}に着^つ虚勞^{きよらう}の上に差^さ出る。癰^{しやく}は病^{びやう}の扁鵲^{へんかく}も。フシ命^{いのち}を救^{きう}ふ是^{こゝ}もなし。地一家^{いちけ}の使^{つかひ}懇家^{こんけ}の見舞^{みまひ}。門外^{もんがい}込^こめあ醫^い者^{しや}乗^{のり}物^{もの}。藤村^{ふじむら}孝庵^{かうあん}浪壽元^{らうじゆげん}と案内^{あんない}有^{ある}。直様^{すくさま}お通^{とほり}り下^ささる。れいと小腰^{ここしやう}折^さり厭^{いと}難^{がた}に。待遇^{ちやうぐ}ふ間に。調頼^{てうらゐ}ませふ。身共^{みども}は千崎彌五郎^{ちさきやいごらう}よりと。地狀箱渡^{ぢやうはう}せば請^こ取^とて。入^いんとするをア、調是々^{てうしし}。お返事^{へんじ}には及^{およ}ばぬと申^{まう}付^けたれば。地其儘^{そのまゝ}置^おて罷^{まか}るぞと。フシ歸^{かへ}るに撥合^{はくが}先^{まづ}走^{はし}り。物申^{ものまう}の聲^{こゑ}どふれの答^{こたへ}。岡崎^{おかざき}兵庫^{へいこ}お見廻^{みまわ}と。地通^{ちうとほ}る跡^{あと}から來^くる奴^{やつこ}。コリヤ。調物^{てうぶつ}さ問^と申^{まう}べい。勘平^{かんへい}様^{さま}は家内^{やない}に寢^ねまり召^めるか。如何^{いか}にも若旦那^{わかしんな}

は大病にて。寢罷居られますが。何方からのお使じやな。イヤ矢狭間重太郎より参り申た。お見やれ狀は十四五本
 櫛に届けて呉べいとて諸方より押者が旦那頼み参つたから。地お渡し申すと云置てフシ出る所へ又。物申ヲツト心
 得御狀かなイヤ。詞三條の大橋法眼只今清船致したと。地擔輿の平着玄關より。詞イザ。女中方御案内。斯お通り。
 フシ成されませ。詞頼みませう又醫者坊主か。イヤ法華坊主でござる。拙僧此間より大坂へ下り。伊藤與茂七方へ尋
 ねたれば。此書簡言傳たいと有故持て参つた。コレハ御慮外先御休息お茶一つ。イヤ忝い。跡の茶屋で飽
 足給たて。腹は酒々漫々と。フシ京道指て急ぎ行。ヤ地開しやと折介は溜りし書狀一つに持。這入る病家を追々に。
 退く醫者を送り出る。野家老彦作手を突へ。詞主人三左衛門罷出まする筈なれ共。晝夜の看病に勞れ。先程よりまど
 ろみ居まする故。地すこしの内御用捨成下されよと。挨拶すれば。コレハ御叮嚀。扱氣の毒な御病體。思慮度に
 過たる心氣の衰へ。其上鬱積を兼ねたれば。兎角難治の症と存る。ノフ孝庵老。いかにも左様でござる。所詮全快は心
 元なふ見まする。壽元老の御醫案も御同事でござらふ。成程御兩所の仰の通り中々本腹とは存ぜられぬ。サレバ
 此兵庫が針術は。針先より氣先。俄の癢は章門を刺。腹が痛めば背中へ打。是背中に腹は代られぬ理穴。然しアノ癢
 は手前が針でも治らぬ。いか様兩三日の中でござらふと。落命追察功者に。頼は少な彦作も。醫師を送つて惜々と。
 納戸へこそは入にける。居間の外には咲出ぬ。室より取し養子嫁。お梅は始終介抱に。床離れねど一夜さも。寢て見
 ぬ中の夫ながら。虚には成さず眞實に。フシ思ひ惱みし其風情。地姫婢に至る迄心詞も優長く。詞お笑止なは御
 寮人様。新枕のお寝はなく。御病氣のお寢間の伽。地辛氣な添伏遊ばすと。霑れ葉に道習ふ。教訓の本押緒。詞一ツ
 女は父母の仰と。媒とにあらざれば。交はらず親まずと。コレ此通り。元來私は勘平様とは従弟同士。今の父母と云
 は伯父様伯母様。早ふ二人に祝言させ。初孫の顔が見たいと仰しやつたが。去年の春伯母様はお果なされ。悲しいは
 勘平様。殿様の凶事をお國へ告んと。早打に此所を通らしやんす折も折。伯母様の御葬禮に行合しやんした其甲斐

も。地亡骸にさへ逢れぬとは。眞に——侍の身の上程。あじきない物は。フシないわいのふ。詞それから御家中も離散と成。お歸り有しは氣の毒なやら。地嬉しいやら悦ぶ間もない。詞アノ御病氣。早ふ本腹させまして。地千代も替らぬ夫婦の盃。振袖留るを其方衆も。祈てフシ給やと有ければ。ヲ、お氣遣ひ遊ばすな。頓がて目出たい御祝言。地千箱の玉の若子様を抱せますると取難すヲ、。詞皆能祝ふて給つた。只何頃迄も愛想を限されぬ様に。添遂るのが私が手柄。地去ながら婦人に七去とて。女の身に去られねば成ぬ事が七つ有と。コレ此本に書て有。詞夫はの。一には舅姑に従ざる女は去べし。二つには子なき女は去られねば成ぬと有其方衆とても身の行なひ。慎みやいと誠の。フシ書にも違ふ退去は縁。詞薄雲の我名さへ憂しと引る、稚兒に見せたや見たや妻木樵。鎌倉路より遙々と。辿りて爰に。フシ來て見れば地美々數構へ氣後れし。イむ軒に降掛る。時雨はよいしは差窺ひ。詞俄の雨に難義致しまする旅の者。大事なくば暫の舍り。地御赦されてと詞付怪しうあらねばフシ呼入て。詞よもや女中のお獨ては有まい。定めてお通もござんせふ。イエ——連と申したら此稚兒。東西辨へぬ者を頼みに。知らぬ長路を迷ひまする。ム、はてな。見れば美しい染絹に包んで有は。三味線の様に見へまするが。長の旅には應はぬ物を持てござんすな。成程御不審は御尤。是りや大切な人の筐。どふぞ此主に逢たい見たい計に。遙々と參りました者でござります。今で思へば此三味線の模様は氣掛り。尤互の合點にて厭別れは仕たけれど。地思ひ切ぬは女子の常。忘れ易いは男氣の早秋風と色變る。紅葉の蒔繪擦落し。身の果敢なさは唱歌にも。言れませぬと涙含。扱は噂の薄雲と悟れど態と何氣なふ。詞イヤモウ聞ぬ先から。哀れらしうて面白そふな事。幸徒然の折と云。お前は旅の憂散し。其お咄しを歌に寄。彈て聞して下さんと。地望むは夫に聞せたさ見せもし見もしさせたさに。フシ明る障子の打伏て瘦衰ろへし顔形。ノウ戯かしやいたはしや其いたはりと知らぬ身の。憂も愁さも打明し。言度事の數々は。人目の關に壞れても。留らぬ物は涙にて。咽返つてぞ。泣居たる。詞サア——旅の女中様御寮人様のお望を。早ふ——と。地女共。譚は浮

氣。憂目をば。三線の糸の音を忍び。詞語るに付て悲しきはコレ此稚子の身の上でござりますはいなア。歌父は播磨の何某とて人に知られし武士よ。母は東の女郎の果。此兒をもふけ育てしが。詞過にし春の末つ方。歌我に此子を預け置。勞しやな此稚愛は。父よ。く。と。戀焦。詞ヲ、目が覺たか可愛やく。コレ乳々と含ても。と。たいく。アレく。彼の様に云暮し。歌夜明の鳥と諸共に。間眼もせず泣明す。餘り見る目が悲しさに。來惡い所へ連れて來た。心を不便と思し召。御寮人様お執成お願ひ申上ますと。隠し包みし薄雲の。暗て親子の名乗合。お惡悲く。と。揺フシ口説。只伏沈計なり。詞ヲ、お道理じや尤でござります。コレ申しお國からお供仕した者共の。噂に聞たお二人の中。妾に遠慮遊ばさずと。何卒親いお詞を。交して進で下さります。アレく彼の幼氣な愛盛り。地顔が見たふはない事かと云と答へず勘平は。瞬き繁く數通の書面。繰返し見て火鉢に投。火中のフシ白灰と爲す計。詞エ、餘りな思ひ切。お前はお見捨成されても。此梅は能見捨ませぬ。必氣遣ひさしやんすな。其子は私が育ると。地抱取んとする所を。ヤレ聊爾なり控へよと。刀引提三左衛門つかく。と歩出。詞我子の武道に障礙を成し。魔王と云はそれなる賣女め。鹽治家より師直へ賄賂の金子。左平太是を掠取。其金を以て儕を請出し。妹と名付忤めに呉しとや。去るに依て師直賄賂せざると心得。鹽治殿に苛酷當りしを。憤り。殿中にて刃傷に及び。切腹召れし根を探らば。其女めより起りし事。何ぞや纔の恩義に緘れ。無念の汚名を諷れなば。先悔臍を嚙とも返らじ。既に今主家の仇と成たる者の。假にも妹と呼れし奴。打放す共何の事は。ア、年寄で武邊も氣丈も。衰へたるが儕等が仕合せと。地父が怒りは勘平が。肝に硯刺切る障子。礪と轉びて聲を揚。詞寧死たい殺して欲い。御機嫌直る事ならば何の命が惜からふ。地其代には此坊を孫よと云て下さります。コレ拜みます。お情でござりますういなア。詞エ、父様お心強い。母御は何もあれアレ彼子は。現在貴方の。ヤア孫杯とは慮外至極。不義なる中に生れし小忤。我屋敷の土も踏すべきか。早く立去れ行居らふと。地云と立まく鴛鴦の陸に迷ひし心地して。フシいとど見る目も苛らしき。詞ハテサテ出よと云に泣

滞奴。イデ引立んと直突立。地裾に縋つて。詞マアくく待て下さりませ。お心に入ぬ事ならば最ふお願ひ申ませぬ。がせて一夜か二夜さを。地ヤ面倒なと振放し。庭に駈下り衿髪取り。情用捨も荒氣なくフシ外面に岸波と突出せば。わつと子も泣親も泣。道理は何程道理でも。孫は子よりも可愛いと。云には違ふ親御様。餘り難面胴欲と。恨み託て淫々とフシ身悶。してぞ歎きける。地三左衛門聞耳立アレ。詞表に小兒の泣聲は。エ、聞へた捨子じやな。偶人間と生れし者。畜類杯に喰せんは無益の殺生。お梅拾ふて遣ふかい。エ、そんなら彼子を捨子にして。ハテ父母も知れぬ孤。養育すればとて誰が黠の打人が有ふ。早く拾ふて遣めさと。地思ひ掛なき照降の。替らぬ内にと心も空。詞薄雲様も嬉しかる。夢ではなにかと思はるゝと。地霑れし梅も胸開き。肌に稚兒抱取て。歌寝んく寝んく寝こせい。く。ねんねが傳も入そふな。事ではなにかと目隄する。詞ハイくく次手に私も彼お子の。乳母に抱へて下さりませ。心が緩たか乳の張。早ふ上げ度ござります。ム、ハ、ハ、ハ、不便もない自由な世界。子を拾つたれば早乳母迄が調ふた。成程次手に抱て遣ふ。お梅其小兒連て來い。ドリヤく。拟能器量。目付口元鼻筋まで。擬能似居つたな。何じや祖父よと云か。ム、く健な奴よ能云つたと。地堅い親仁の虚折は。朽木の株に芽生せし。蒼の花と見るぶさを。フシ撫つ擦つ餘念なく。詞コリヤ誰が子賢。貴方のじや。お前のじや。地二人が中のお手車。廻る廊下の奥座敷。祖父も浮れて附添行。地無慙やな勘平は。君父の恩を身一つに請てぞ重き病の床。漸に起直り。法眼の醜劇の中せしか。贅積の痛も忘れし此元氣。汝達も無看病に勞れたて有ふ。勝手へ參り休息せい早く立よと人を拂ひ。地我亡君の仇を討ん爲鎌倉へ出立せんと。有間敷偽りをかまへ子として父を欺きし。其罪恐れ有事なれ共。詞聲親子兄弟たり共。洩すまじと誓詞の血判。それ故に只何となく仕官の望有と言立。暇を願へど承引なく。達てと云ば親の名跡。斷絶との仰默止難く。地留れば不忠行ば不孝。二つの道に苦しむ死病。逼りに迫る今日只今。詞計ず慕ひ來りし悴。拾ひ上下されしは是ぞ誠に天の加護。然る時は父の名跡に氣遣なく。忠孝二つ全き道理。嗚呼悦ばしや

嬉しやな。イデ此上は告るに及ばず打立んと。地枕の刀杖となし。立上れ共踏堪ず。どうと轉びつ這廻り。心計は逸れ共身體自由ならばこそ。エ、詞淺ましや。筋骨一度に碎くる如く。一足だにも引れぬ苦痛。然あれば迪斯迄も思ひ込だる我存念。やはか晴さで置べきかと。地又立上れど逆上す。虚熱に昏む眼を見開き。エ、詞如何に天數盡れば逆節義を立る際となり。助り難き此業病。地神も佛も斯程迄見放し給ふか口惜やと。無念の涙斑々々。面に流るゝ發汗の。焦慮ば氣力もいとど猶。次第／＼に弱果今を。フシ限りと見へければ。詞ハ、ハ、ハ、是非もなや。逆も全快叶はずば。無慙／＼病に死なんより。深く腹切て。左平太に欺れし。盟約一書の誤を償ひ。一つには又亡君の。御跡慕ふ追腹ぞと。地思ひ極めて書置の。筆の立處も定まらず。コハ地不甲斐なき根性やと。狂ひ怒りて我と我。喰さく拳の。フシ血も枯々。地刷白し墨の染鈍にも。書残したる最期の筐。拜領の長船騰際迄。既に切行息の緒も糸に縋てふフシ武士の物の。哀れや止むらん。地斯とは知て急々と。フシお梅は夫に稚子を。見せる次手に。詞薄雲様。久し振て傍へ行しやんしたら。坊より先へ抱れたかるふ。ア、じやら／＼と何仰しやる。餘り粹な奥様で。結句何やら氣が張様な。ホ、ハ、ハ、何の斟酌サアお出と。地何心なく唐紙を。朱に伏たる其有様。二人は二目と見も遺すわつと斷魂泣出す聲。耳に應て三左衛門。遺戸突明駈り出。南無三寶と仰天し。フシ軻ながらも追の父。血汐ののりの封じ文。取納たるフシ一思案。下部一人罷出。詞大星由良之助御入來なりと取次す。ナニ大星氏の參られしとな。ヤイ兩人の女共。聲立て輕震るゝか。叫な泣なと地呵り付フシ襖引閉出向ふ。地光を隠す明鏡の怨むらくは戰國に。顯れざる此一人フシ案内に連て打通り。地互に禮讓席を定め。詞暫く面會申さねど。悴が病氣度々お尋の使者に預る事。淺からぬ御懇志と。地挨拶すれば由良之助。稍顔色を打守り。詞山根より額に掛り。愁の黒氣顯はれしは。是正しく死別の相。推量りし事ながら。保養叶はず子息勘平。死去召れしと覺へたり。残念さよと賢察に。三左衛門横手を打。成程只今自殺仕つた。ナニ生害召れしとな。サレバ其趣意は存せね共。御姓名を記せし彼が遺書。イザ御披見と差置

て。地立んとするを押止。アイヤ御心配には及ばぬ事此期に臨んで何をか包憚からん。地苦しからずと見る文體。詞兼々御約諾の時節と存候に付。僞りを以て親共に身の暇を願ひ候所。企ての義存ず候故中々許容仕らず。尤心底打明候は。却て満足仕べくと存候へ共。大望の事はみだりに口外致し難く。兎角心中を惱し候て三左殿コレ御覽なされ。ドレ／＼苦しからずばお見せ下されい。ヲ、兎角心中を惱し候て。圖ず九死一生の病を請。旦夕に逼り候一命。暗々病死仕らん事無念に存じ。今般自殺仕候。ヲ、尤々。サ、由良殿。此跡を御苦勞ながら成程拙者讀聞ませふ。ナニナ今般自殺仕候。不運の我等御憐み成下され。彼地御働きの砌我等が姓名御呼立下され候は。今生後生の御厚恩と。地讀下す内三左衛門。胸に必至と對る後悔。左社と汲取由良之助。詞恩愛の別れに一滴の涙さへ催されぬは。大丈夫と申すべきなれど。夫は餘りなる御憤。返つて未練に見へ申す。イヤモ最前より英雄の手前を恥。袖には中落さねど心に沁る老が涙。御推量下されい。ハテ入らざる御遠慮。スリヤお赦し下されふや。エ、地忝やと轉び寄。死骸にひしと獅噛付。詞エ、聞へぬぞよ恨めしい。何故打明て呉なんだ。斯るゆゑし企と露聊か知ならば。悦び進んで見立ふ物。跡先の辨なく呵り怒つて止めたが悔しいわい。残り多いわい。左程磨きし魂を塊瓦と捨てた。愚痴頑な此親には。生れ優つた嗚呼の奴。ヲ、／＼健氣なり出来いたと。地云聲咽に噎返れば。お梅は寧正體なく。父様や母様のお許し請て夫婦じやと。詞に結ぶ下紐も解しない程日を算へ。松竹祝ふ島臺も。水盃で祝言する。心を推して下さんせ。詞ヲ、お道理でござります。私も丁ど一年を隔焦て漸と。今來て今の憂別れ。此様な果敢ないお姿を。何の此子に見せふとて連れて來たのじやない物を。斯云愁氣が餘所外に又有事かお梅様。サイナア申し薄雲様。殿御に離れる身の因果。子を先立る親の業。果報拙い此孫めが。生先思へば不便やと。地あやなき顔を三人が敷きヲシ六つの袂や朽ぬらん。地餘所の悲しみ餘所ならずと由良之助涙を浮め。詞愁傷の思ひ遣方なく。二人の女も諸共に。自害もすべき心ならんが。左に非ず。僅に遺る此稚子。守育つるが夫へ貞心親への孝。

本懷遂す死したる勘平。死後の怒を和けて未來を助くる其爲に。此子を早野和助と號。義臣の列に加ふべしと。地父が疵口稚子の。手の内染る楓の血判。フシ遺書に寫せば。地三左衛門飛邊巡て三拜し。詞ハ、ハ、ハ、忝き御計い。悴めが存念を立させ給はる御厚恩。何を以てか謝すべきと。地悦び涙ぞフシ道理なる。地嬉しさ悲しさ二人の女。惜や盛の花蔓切て捨たる浮世の塵。拂へど。露の消返り。後れ先立子を思ふ。老が心の愚鈍くは。文字足す。文字餘り。搔蟻りたる涙の雨凌ぐ方なく見へければ。地大星死骸に打向ひ。詞いまだ汝が肉冷す。魂去すば能く聞け。是こそ高の太平太が偽謀て書せし誓約。幸我手に入たる故。寸志計の手向ぞと。地義者の詞は靈魂に通ぜし物かあら不思議や。體忽ち二足三足。拔取双左平太が。當名をぐつと板敷迄突通したる一念力。地良兼扇打開き。詞ヤレ出來したり早野勘平。敵を夜討の一番乗。適手柄。未來の土産成佛せよと。地合掌に。笑を簞と殘し置どふと倒るゝ此世の限り。出行勇士見送る義士別れ。くくと、三重へ成にけり

第十

地此郎老て瞿瞿とは。異國に猛き武士成をや。然れば徳には隣有江の嶋の片邊織部彌次兵衛が假住居。武藝指南を世渡りの。業と師走中空の。フシ短き日影入と早。近所隣が上を下。フシ返せ太鼓に行人共。膝突合せ方角の。人の手配母親と娘。お弓がお茶運ぶお烟草參れ雪空に。たんと御苦勞様々の。追従口も迷子を。フシ尋ねて貰ふ氣兼ねなり。地上座に家主權兵衛が。火鉢に掛りノフ婆様。詞娘女も構やんな。此比小僧が迷途てから。二組三組の返せ太鼓。大勢の人悶着に心遣ひと草臥さしやる。アノマア云しやります事は。モ餘他人家にお世話掛。一端掛に皆様より。尋ねに出べきい爺親も。子より前から他所へ參つて今に歸らず。せめて詞のお禮なと云せたい。祖父様といや見へぬ孫故氣は無端。何事も此二人に銘じ。ア、そりや近所は皆相互てござるはいの。カ云じやないが此權兵衛。借屋に掛ては

天王様。ヤ怖い。狐て有が狸て有ふが。何の様な魔の物でもどっこいすつこい爲す物じやないはいの。祖父様は壁
 治崩れの武士。犂と云ば高田の馬場で岡ない手柄を仕た剛の者。其孫をば摘むと云は。此奴は餘程功經た古獸。定
 めて是は推量に。歌臍の下谷の穴稻荷。年増の狐に訛された。バ、バ、バ、物て有ふと騒々し。門は半時の時太鼓。家
 主聞より突立上り。詞ヤア。旁。アノ太鼓こそ暮六つ半。時こそ移れ迷ひ子を。尋る手配油斷すな。地魚屋は目黒
 榮蝶堂。艾實には筋違見附。夜番は初夜に四つ谷から。番町掛て行て戻れ。軍書讀には鐵炮洲。お醫者は差詰辨慶橋。
 八百屋は大根畑から。梅若近所を合點か。心得店借家主藏め。出て行た跡は寂寥と。汐の干フシたる如くなり。地跡
 片付て掃出す。箒片手にノウ母様。詞此彌太郎は只獨何所にどふして居るぞいなあ。サイノフ。谷七郷を手分して。
 尋搜せど知ぬのは。狐狸に妖されたか。人賣にやと勾引され。遠い國へても往た事か。地見へいてさへ是程に思ふ
 物ひよんな事など聞たらば何如有ふ。悲しい時は取分て。神信心が第一と。力付合ふ親と子が。挑添る燈明の。油
 は己が光より消るは。義者の心をや。一味徒黨の會合より。立歸る織部安兵衛我家のフシ軒に立留り。詞フン月明か
 に雪白く。萬象一時に花咲風情。雪に故人を尋ねたる。剡溪の詠も斯や有ん。雪晴て心に叶ふ今宵哉。ハツア地面白
 しと俳諧の。一句に籠る義士の詠。風雅に富し香さ。夫と悟てお弓は立出。マア詞此方の人とした事が。此間から
 顔さへ見せず。其所に何して居てぞいな。マア。フシ内へと伴へば。詞ヲ、安兵衛殿待兼ました。此方の留守に彌
 太郎が迷子に成。返せ。の鐘太鼓。どんちやんと譯はない。夫に祖父様も氣を揉ま。常に引替詞もしどろ。此様な
 時にこそ早ふ戻つて下さつたが宜い。アイ母様のお申す通り。夫は。私と二人が氣拔ひと。地云を打消尖聲。
 詞ヤアフベンべと喧囂しい。東西分たぬ赤子ならば。失たるも悲しむべし。最早五つの年積り。能歩み能物言。日本
 に聞へし安兵衛が名を尋ねても戻る筈。弓矢の慣例毎何時。親も夫も討死せば亂れ狂ふか白痴者。控へて居ろ。ハイ
 ハイ控へて居ましよ。子に無義道なも無理じやない。女房にや常住獨寢させ。偶に戻つて愛想もない。エ、つんと

最ふ。どふなと云たが能わいな。地虚僧てらしい主様へ。御機嫌直しに酒一つ。燂して来ふと立て行。地安兵衛詞を
改。某密に親人へ申上る子細有。母には暫し奥の間へ卒御立と遠ざくる。心白髪こころしろがみの姑が。フシ納戸へ入と引違
へ。障子くはらりと舅彌次兵衛。詞聲殿歸られしか。コレマお聞きやれ其方の留守に孫が迷子。今に於て行方知ず。
生れてから五年の月日。隣歩行も手放して一人は遣らぬほんそ孫。祖父様くんと申したが。知ぬ野山を迷ふた果。淵
川へも轉び込。塞の川原で此祖父を。戀々と泣てやど居まいかと。思ひ廻せば此彌次兵衛。ひよんな長生仕ました
はいのく。何様平生並ならぬ御秘藏孫故。なも失たる故御數き御尤。去ながら是等坏は肉身の私事大切なる主君
の仇。高の師直今宵彌八つの上刻。夜討を掛べき味方の手筈。あはれ兩人諸將に先驅。師直始め家來の奴原悉く
切盡し。鹽治判官の郎黨に織部彌次兵衛安兵衛迎鬼神二人有けると。名を末代に留ん事。地武士の本懐此上なしと。
勇めどいかな進フシまぬ舅。詞イヤサ安兵衛お云やんな。尤一旦主人の仇。己やれ高の師直入手には渡すまじ。名を
一天下に知られんと思ひしも。手柄な祖父を持たよと。孫めが臂を張せん爲。孫が無ければ手柄も入らず。地心の痛
む胸臆。我身の響所かと。權輿もフシなげに取敢ねば。地安兵衛猶も膝摺寄。詞亡君過行給ひし以來。四十餘人の
味方の義士。何卒主君の仇を報はんと。形を苦しめ心を勞し。千辛萬苦は親父様も同じ事。何條悴一人に御心の變る
べきか。片時も早くサ、サ、御用意くと。地諺る詞打消て。ヤア詞姦ましき繰言聞耳持ぬ。孫が有りやこそ血を
引一家。今は他人の入聲殿。早出て行やれと。地手を取て。門へ突出し跡密閉。ノフ是待と斷出て。お弓が名のみ引
留る甲斐も中々明ぬ親。戸の透間より差覗き。詞コレ此方の人。安兵衛殿。地父様こそは一轍に縁切氣でも私や切ぬ
必ず去て下さんすな。エ、胸欲な父様。杉戸一重が二世の縁。隔の垣と成たかと。身を悶たる苛しさ。フシ餘所の見
る目も頂みける。地安兵衛は血氣の慄悍。詞ヤア人畜に費す口なし。獨夫心を變ずれば。百計爲に妨有。フン。ホ
ホヲ夫よと。地逸散にフシ何所共なく駈行ば。地彌次兵衛娘が脊を撫摩く。詞女郎くんと見苦しい。サ、コリヤ泣

なくよ。親は天地に只た二人男と云ば世界中。何れと夫婦に成ふと儘。彼様な奴何の慕ふ事。コリヤ不自由は吾が爲しちや置ぬよと。地戲氣ながらも胸は闊。泣子を親が引立て一間へこそは入にける。地農民は鋤鍬を以て耕し。武士は弓箭に後の名を耕す田代甚太夫。素より壹岐に臣として。殿の一門鹽治家の諸士に心を添けるが。一子安兵衛養子たる。血筋の縁に寄る糸のフシ織部が許に案内する。地聲に出迎ふ彌次兵衛が常に變りし不興顔。不審ながら座に通る。ノフ彌次兵衛殿。昔保元の戦より麻の如くに亂れし日本。今太平に治つて。武者首一つの手柄も出來ず。エ、戰國で有うならばと。腕を按つて暮す折柄。鹽治家に仕へし面々。今ぞ武名を顯はし時。わきて貴殿は老後の思ひ出。若殿原に先驅て。見事な死花咲されんと。羨しく存ずるてや。殊更今宵夜討との。大星殿より主人へ内意。ヤレ悦ばしと取物も取敢ず御見立に參つた。安兵衛義は何處へ參りし。御支度は調ひましたか。サ、どふ。コリヤ如何じや。武骨は常と思へ共。返答なきは何が不機嫌。エ、聞へた。悴安兵衛御所存にばし違つた物。姫殿左様でござらふ。如何にも左様。有ふ事か聞てお呉りやれ迷途た孫はかとも云ず。夜討を掛るの忠義のと。心に染ぬ事一般。小面倒さに只た今追放たれば眞の他人。お手前迎も長居は無用。早速々と歸られい。ア此又孫めが行衛は知ぬかい。何故に戻つて呉居らぬ。地エ、胸苦しや氣遣ひと。遠慮會釋も納戸口。入んとするを待た彌次兵衛。詞スリヤ御邊には主君の仇。恨を散す所存はないか。イヤモ孫が戻らば卒知らず。左もない内は氣もない事。ヤア未練なる一言。虫の様成幼童に心惑。大義を忘るゝ空氣た性根。今迄の好み我手に掛。主君成ねど主君の一門。鹽治殿へ手向て呉んと。地言より早く跳上つて長押の直鎗。取手も見せず突掛る。詞ヤア殊勝と沙首を。交せば透さず疊突。地互に老の挫まず去らず。諍ふ。フシ物音奥の間を。駈出る娘女房が。コレ。詞哺待つて下さんせ。地待てくも聞ばこそ。ア、ア、危険く。見る目危怯さは冷汗。元來強勢不敵の彌次兵衛。無刀の應對田代が手練。岩も通れと突鎗の沙首丁ど枷上れば。直に肋を目當の石突。飛交して拔打に。驕と稻妻長柄の尺。一尺計切折たり。地南無三寶仕損せしと

取直す。一間の内より高聲に。詞今宵の戦ひ宅中なれば。柄の短きぞ宜んめりと。フシ聲諸共に立廻す。障子を颯と安兵衛が。血汐滴る切首を。馬手に引提立たるは怪しく。も又勇を敷けり。地凜然たる眼。養父に向ひ。詞誠や大徳は愚成が加く。大信は能僞る。胸に忠義を珍藏し。態と明さぬ親父様。所存の根萌は是ならんと。地差出し見する死顔を。見るにお弓が氣も狂亂。二人の父は見向もせず。諸手を組てフシ默する計。地安兵衛首を潑たと睨。詞我亡君の横死より。仇を討て臣たるの義を立んと。心を苦しめ年月を送る處。時至つて今宵に迫り。計らずも養父の不興。ハレ心得ぬ舉動と。思ひ寄たる實父の内。窺ひ見れば此悻。餘念なくも遊ぶ體。扱こそ是よと引寄て。地不便ながら一討に。討て子故に迷はぬ證據。我所爲ならぬ養父へ言譯。詞忠義に碎く我肺肝。儕故に既の事無にせんとせし腹立と。地氣は張弓の安兵衛が。撥と疊に投うつて。涙一滴見せざるは。フシ泣に勝りし哀れさよ。地彌次兵衛思はず聲を上。詞悻悻疑ひ晴た。出來た。く。く。く。ア地只忘れぬは君の恩。讎難きは人心。四つや五つ幼子を。人商人はよも取じ取隠したは。姫殿。仇を報じて討死と。覺悟極し悻が惜さ。孫を餌に飼引寄て。長生させる卑怯な所存。請繼悻も嘸有んと。搜り過たるフシ我過ひよんな思案を仕て退て。不便や孫を殺させた。堪て吳赦して吳と。敢なき首を取上げて。詞コレ姫見やれ此死顔。莫爾笑ふて居る様な。死だ様にはないわいの。生れ付ての横伯者。可愛や五日跡迄は。何にも知ず機嫌能ふ。吾が背中へ搔上り。父様は髪が黒いが。お前は何故に白いやと云居故。此白髪は目出度物。己も祖父に似寄てな。此様に白髪の生る迄。長生せいとフシ云たれば。イヤ己は白髪は嫌じやと云たが。責て十迄生もせず。短寸く髪死ふと云。物の前兆で有たかいと。地首を兩手に抱占。身を抛伏して噓返れば。お弓はいつそ正體も何て世界の憂事を。集た身とは生來て。死ぬる覺悟の我夫。我子も嘸や死出の道。可愛や小足てとぼく。泣々人行である。道知らぬ迎戻れかし。歸れ我子よ彌太郎と。叫ぶ甲斐なき魂呼び。母も涙に眩ながら。サイノフ。死ぬる子は賢しいと。爺親の諷やる諺を能覺へ。地を走る獸空を翔る翼迄。親子の哀れと幼氣に。

廻ぬ舌て諷ふたが。耳に残つて忘れぬ。思ひ出す程骨も。身も碎る様で苛しいと。口説フシ立。流涕。焦れ泣沈む。地憤深き甚太夫。思はずわつと取亂し。ヲ、調道理ておじやる姫殿。可愛や嫁女悲しかる。云て甲斐なき事ながら。鹽冶の家臣多き中。分て武勇の御邊なれ共。平生孫に愛深く。自然今度の仇討に。心後る事あらば。鹽冶の家に忠臣の弓取二人失ふ残念。孫なくば宜らんと。密に來り連歸り。隠せど餘所に推量の。めは外ず悴に迄。地欸掛る憂事を。見聞も吾が僻から。赦しやれ旁。彌次兵衛殿。左程忠義の心底を。疑ふたは幾重にもお詫。詞イヤサ。お手前よりも。某が。冷淡性根と蔑めたが。吾は却て面目ない一人の奔走子秘藏孫。隠すも。討も。見捨るも。地心は同じ忠の道。義を鐵石の武士も。恩愛愚痴の血の涙。見せじとすれば胸に充。眶に漏て班々々。わつと一同に取亂す身を知る雨の。フシ一時雨防ぐ。軒端も見へざりし。涙拂ふて母親が。詞老少不定と云ながら。纏の年を一期にて。死だ彼子が後世菩提。祖父祖母夫婦二親が。地佛間に入て諸共に。地首に手向の六字號卒と我身を先立し逆様事を見よとてか何存生し恥白髪。老も若きも俱泣に。盡ぬ歎きの目も闇き。闇路を照す御明しの一間へ。俱に入跡は。夜嵐更る遠近に返せ。の。物の音も。幽に告て。哀れ添ふ。六字の御名の手向水。涙に絞る。聲立て。南無阿彌陀佛。く。く。く。水も木草も子の刻過。時刻も迫る夜討の面々。長柄半弓繼梯子。人目憚る火消の出立。列を正して押て行。群を離れて千崎小寺。扉に近く潛々聲。詞織部殿父子用意は宜や。亡君の仇師直が館に寄る今刻限。何故に遲滯有。片時も早く發足。義に當つては他に譲らず。お先へ參ると呼はる聲。地後れじ物と安兵衛が。翻りと庭に惡來か多力も挫ぐ。フシ其勢ひヤレ。詞待て悴と一間より。地留るも父が悦喜の音聲。詞英雄死を見る事歸るが如し。勇し去ながら。兼て定まる敵地の相圖。臨機應變計難し。人數を二手に分備。東は搦手二十餘人。西は追手二十三人。諸士の差圖は汝が役目。心得有やと尋ぬれば。詞ホ、御安堵然るべし。元來教下されし。夜討のかけ引法を亂さず。表門より馳入て。鹽冶が舊臣仇を報ずと。地呼はり。切入べし。其時四方へ逃散者女童を追へから

第十一

ず。詞ハ、ア仰にや及ぶべき。目的は師直只一人。四十餘人の合印。敵に勝色いろはの文字。山と川との合詞。味方
を集る相圖は笛。詞ホ、、、連れ熟せし軍慮の奥義。イデ某も發足せん。裝束持やれの聲に連。地母と娘が持出
る上着下着の仕立際。手早に金の短冊も。末世に惜む弓取の。輝く名をば袖印。確と締る上帯も。粧ひ猛々、フシ出立
榮。地今ぞ名残の女房が。泣じとすれど聲曇り。ノフ是れ我夫彌次兵衛殿。不慮に過行給ひしに御主人の仇師直を。
ぬふ夫に添からは。毎何時に無端。別れもせねば成ぬ身と兼て覺悟は仕ながらも。今日の今やど夫や子の。勇々しい
悲しい門出の飽ぬ別れに成ふとは。思はなんだと嘸上げ。歎けば娘も涙聲。我夫申し此世の別れ。随分目出たふ御本
望。必二世の契をば。遠へぬ様にも都度くは。言ぬフシ心の苛しき。地始終を聞て甚太夫。奥の間より歩み出。
詞ホ折柄四方に降雪の。中に測まぬ松が枝は。正に忠臣の心の操。世に顯るゝ時成哉。イテ門出の壽と。地時に扇
の一奏。臨兵の交り。頼有中の門出哉。地諷ひ終れば安兵衛が。小柄の手裏劍散雪と。俱に梢を。頭轉倒。直に貫
くフシ穂先の止。諸ヲ、出来されし御兩人。敵の忍び血祭宜し。甚太夫殿冥途で逢ふ。母人にも御賢勝。娘隨分長命
せい。お婆然らばと。地無義道に別行こそ。三重ゆゝしけれ

地禍は惡の積れるに由り。滿れば虧る月の夜の。雪の茶會と師直が館の設物好に。風雅を盡す歡樂は。今日に窮る弓箭の運とフシ知らざる愚さよ。地子息左平太師泰。對客の草臥休め。爐を擁たる紅葉の。正に同惡相害し。鶯坂伴内藥師寺が打解振の咄し伽ノフ。詞藥師寺殿アノ一挺は御小姓組稻田梅吉。餘程太鼓が上つてござるの。サレバ否又今日の殿の御趣向。恐らく廬園陸漸も跣て裸。モ我々式が感心と申も恐れ。彼狼狽者の。鹽冶判官が浪人共。仇を狙ふと聞へし故。館の出入も嚴重に御用心。絶て風雅のお遊びも無しし處。大星初腰が抜。彼徒の奴原離散

と聞へしより。久々にて今日のお茶の湯。二重壁も明日は打壊し。地彌、お家萬歳と阿る詞に高の左平太。詞何さ
く萬點の螢火太陽の光に敵せず。浪人めらは云に及ばず。今日本に誰有我々父子に敵たはん者覺へなし。ハ、
いと。フシ高笑ひ。地洩聞へてや一間より。左平太が妻半衛御前。悠然に歩み出。詞朝風より差集ふ客人のお相人
囁お勞てござりましよ。夫に付今のお咄し。一間で聞て驚く計。四方に恐るゝ敵なければ。諸士怠りて國弊とやら。
尤鹽冶の浪人共。恩を忘れて誓に背き。仇なす所存なしとは云ど。如何成方便有てかは斯云觸すも計れず。地御用
心をぞ願はしと諫の詞。歴々の武士もフシ及ばぬ利發さよ。地諫を用い愚蒙の左平太。詞ハ、、、大丈夫の爲す
業。女の知所に非ず。ナニ薬師寺驚坂。最早今宵も子の刻過。我寢所にて寢酒の一献。皆斯來來やれと。地打連て障
子フシ引立入にける。地跡に残りて半衛が。ア、地去連は是非もなき夫の心の奥の方。見遣茶の間の椽傳ひ出るおさ
みが傍近く。詞不調法な私が手前。お茶お一つと。地差出す茶碗手に取ノフおさみ殿。詞聞は其許は鹽冶の弟御。縫
之助様とやら云ふ人と。二世掛たとやら可愛らしい。中で有たじやないかいの。苦界の里の憂身連。思はぬ方へ請出
され。噺縫様が戀しからふの。ナントマア欠落して去氣はないか。エ、イ。然嘯其許を遙々連歸り。花紅葉共詠めて
ござる。夫の目を貰其許をば。都へ返し縫様に。添して遣ふと世話するも。頼たき事有故。其譯篇と聞て給べ。舅御
と云我夫も。鹽冶の家臣が云合。仇を狙ふと世の取沙汰。其許に頼むは愛の事。今宵の世話を功にして。家中の諸士
へ縫様から。敵討を止めて欲さ。地生々世々の御恩ぞや。聞分て下されよと厚き誠の言の葉を。感じながらも左あら
ぬ體。詞ホ、奥様の聞へぬお詞。廊に勤めて居る時こそ。引手に離く憂身なれ。請出されたる殿御こそ。定まる縁の
妹背中。貴たと云奥様も有ながら。さもしい此身を彼様に。地不便を掛て下さんす。貴方に何と背れふ。お免し成さ
れて下されと。云を言せザイヤ／＼。詞女ながらも武士の妻言出した事引はせぬ。此上は片時も屋敷に足は留さ
せぬ。フン其一言で皆知た。誠にしう云並べ。底の心の凄さは妾を遠ざけたい計。格氣の角を押隠し。上ずんべりの

情顔。出直し成されとフ言捲る。地半菰瀬と逆上し。ヤア 詞推參成其一言。達て去すば半菰が。地目に物見すると立
 寄て引立る腕。拂ふ腕雪の。柵雪の庭。一度に驟然と飛下て。互に負じと挑み合。轉んず起す根根り脛も現に紅の裾。
 紅の肌着も玉の汗。波寄るフシ計揉合たり。地時に怪裏表。一時に揚る関の聲。詞鹽治判官の一家中仇を報すと云
 聲も。天に響て聞へたりエ。詞斯有らせまい爲にこそ。心を碎きし甲斐もなく。敵寄たれば舅御様。夫も今ぞ絶體
 絶命。死出の先がけ急がんと。地覺悟の半部。覺悟のおさみ。詞待に甲斐有る今月今宵。義士の本望達する上は。自ら
 逆も人々の。地死出の先がけ後れじと。互に礮と一間の障子。飛走る血汐紅のの哀果敢なき 三重へ次第なり。大星が
 軍慮の如く。義士の面々館へ込入東西より。関を作つて攻入ば。寢耳に水の一家中。周障ふためき フシ逆惑ふ。地中にも
 敵對ふ者あらば。矢狭間千崎竹森織部。原郷右衛門徒黨の面々秘術を盡して切立れば。双向ふ者も嵐に連。降來る雪の
 フシ烈しき戰。地鬼神と勇む其中に。大星力彌左平太に渡り合。追駈來り大音上。詞ヤア／＼左平太。亡君の仇儕等
 親子が首を取。地覺悟せよと呼ばれば。ヤア惡き過言。此世の暇と切て掛る。心得力彌が請留て。拂へば切込左平太
 が。刀瓦落と打落され。南無三寶と逃行を。飛掛つて後から。大袈裟切に討放し フシ猶奥深く駈り行。地追詰られて
 薬師寺が。狼狽廻つて逃來る。程能向ふへ寺岡が。どつこい胴骨大槌にて。打倒されて薬師寺は。眼王飛出て フシ死
 てけり。地折柄大星親子を始め義士の銘々駈來り。一つ所に集りて。詞屋鋪の隅々残りなく。上は天屋下屋迄。尋ね
 さがせど知れざるは。討洩せしか残念と。忙然として立たる所へ。地師直を宙に引立重太郎。詞ヤア／＼旁柴部屋に
 隠れ居る師直を。地生捕たりと呼ばれば。人々生たる心地して悦び合ぞ道理成。詞由良之助師直に打向ひ。我々は鹽
 治が家臣。斯御館へ亂入せしも亡君の仇を報ぜん爲。速に御首を給はるべしと。地兩手を突謹んで述べければ師直些
 も惡怯ず。フ、詞神妙／＼汝等が忠義に免じ。某が首を只今得させんと。地隙を伺ひ拔打に大星目掛切付るを。搦
 潜つて腕首を確と捉へ。ホ、詞殊勝き御手向ひ禮義は一旦此上は。地主人の敵と大星が。初太刀に寸斗切付たり。

人々立寄年月の恨の双思ひ知れと。寸段く切付く。跳上り飛上り。悦フシ涙に眩居たる。地由良之助は亡君の腹切刀取出し。師直が首掻切是より直に御菩提所。圓覺寺へ立越て。御墓に首を供へんと打連立か弓取の。忠義の誓未代に。武士の鑑と輝きし。大星一味の四十餘士。昔を爰に繰返し語るも。御代の恵みかや

天明七丁未九月廿六日

作者 若 竹 笛 躬
梅 丹 青 堂
野 下 風

石高は千五百
册数は四十七
廓景色雪の茶會 終

